河野通章編

東洋史綱 全

東京 大倉書店發行

東洋史綱例言

一本書は文部省審査の中學校教科細目に基き之に多少の斟酌を加へ中等教育の教科用書に當てむ爲めに編纂せるものなり

一本書は生徒に暗記の便を與へ教師に敷演の餘地を殘さむ爲めに叙述を簡易にし一課を一回の授業に充てり

一我國の沿革は別に本邦史の科あれは本書には其重複を避けて東洋の大勢に大關係あるもの丶外は多く之を省略せり

一本書は東西兩洋の沿革を對照する便を考へ時の前後を次第するには西洋紀年を用へり

一本書には沿革地圖及對照年表を附せり

十月一日

編者識

目次

東洋史綱目次

第一課　太古の支那　唐、虞、夏、殷の世　一
第二課　周の初世　三
第三課　秦秋の世　五
第四課　周の制度文物　孔、老二子　七
第五課　戰國の世　九
第六課　周末の學術　一一
第七課　太古の印度　一三
第八課　佛教の興起　一五
第九課　秦の一統　楚、漢の攻爭　一八
第十課　漢の初世　二〇
第十一課　漢武帝の業　四夷の服屬　二二

第十二課　漢宣帝の業　王氏の簒奪　二四
第十三課　後漢の初世　西域の叛服　二六
第十四課　後漢の末世　二九
第十五課　匈奴の盛衰　三一
第十六課　烏桓、鮮卑、氐、羌の盛衰　三三
第十七課　三國の鼎立　三五
第十八課　晉　五胡十六國(前)　三七
第十九課　晉　五胡十六國(後)　四〇
第二十課　東方諸國(古朝鮮、三韓、扶餘、高句麗、百濟、新羅)の古史　四二
第二十一課　大月氏及印度　佛教の東流　四五
第二十二課　宋、齊、梁、後魏　四八
第二十三課　陳、北齊、周、隋　柔然、突厥　五〇

第二十四課　唐太宗の治　唐の制度　五三
第二十五課　唐の外征　武韋の禍　五五
第二十六課　唐玄宗の治　安史の乱　五七
第二十七課　藩鎮宦官の禍　唐末の大乱　五九
第二十八課　東方諸國(高句麗、百濟、新羅、渤海)の盛衰　六一
第二十九課　西北諸國(突厥、回紇、吐蕃等)の盛衰　六四
第三十課　波斯、太食の廢興　六七
第三十一課　漢、唐の學藝　六九
第三十二課　漢、唐の宗教　南海の貿易　七一
第三十三課　五代、契丹の關係　七三
第三十四課　宋、遼、西夏の關係　七六
第三十五課　新、舊兩法黨の軋轢　七八
第三十六課　遼、金の廢興　八一

第三十七課　宋、金の交渉　八三
第三十八課　宋代の學藝、宗教　八五
第三十九課　宋代の高麗　八七
第四十課　宋代の、中亞細亞及印度　八九
第四十一課　蒙古の勃興　太祖の西征　九一
第四十二課　太宗の南略　拔都の西征　九四
第四十三課　憲宗の南征　旭烈兀の西征　九六
第四十四課　元世祖の一統及外征　九八
第四十五課　元の版圖　東、西兩洋の交通　一〇〇
第四十六課　海都の興亡　元の衰微　欽察　一〇三
　　察合台、伊兒三汗國の盛衰
第四十七課　明の初世　一〇五
第四十八課　帖木兒の兼併　一〇七

第四十九課　明の中世　一一〇
第五十課　交趾の叛服　沿海の寇盜　一一二
第五十一課　明の末世　一一四
第五十二課　ムガール帝國の盛衰　一一七
第五十三課　葡萄牙、西班牙の東略　天主教　一一九
　　の東流
第五十四課　滿州の興起　清世祖の一統　一二三
第五十五課　清聖祖の業　一二四
第五十六課　清高宗の業　一二六
第五十七課　清初の制度文物　一二九
第五十八課　荷蘭、英吉利、佛蘭西諸國の競爭　一三一
第五十九課　英吉利の印度經略　一三四
第六十課　清、英吉利の交渉　一三七

第六十一課　長髮賊の乱　清、英吉利、佛蘭西の交渉　一三九
第六十二課　露西亞の東略　清、露西亞の關係　一四二
第六十三課　露西亞の南略　清、露西亞の關係　一四四
第六十四課　安南、暹羅　一四六
第六十五課　清、安南、佛蘭西の交渉　一四八
第六十六課　日本、清、朝鮮の關係　一五一
第六十七課　日本清の交渉　一五四

東洋史綱地圖目次

第一圖　唐、虞、三代圖
第二圖　春秋戰國圖
第三圖　秦代亞細亞圖
第四圖　漢代亞細亞圖
第五圖　三國、晉初圖
第六圖　五胡十六國興亡圖
第七圖　南北分裂時代亞細亞圖
第八圖　唐代亞細亞圖
第九圖　宋、遼、西夏交渉圖
第十圖　宋、金代亞細亞圖
第十一圖　蒙古極盛圖

第十二圖　明代亞細亞圖
第十三圖　ムガール帝國圖
第十四圖　清初疆域圖
第十五圖　現代亞細亞圖

對照年表

東洋史綱

河野通章編

第一課　太古の支那　唐虞夏殷の世

太古の支那は宇内の舊國にして其文化は夙に漢種に發せり漢種は嘗初西北の地より次第に黃河の流域に徙來し今より五千餘年前既に幾多の部落を立てゝ各〻酋長を戴きしが後ち黃帝軒轅出でゝ漢種を一統し黃河南北の地に始て大帝國を建て制度文物の端を開けり黃帝の後、顓頊（セン）、帝嚳（コク）、帝堯、帝舜と云ふ

唐虞の世

帝堯陶唐氏は平陽に都し義和二氏をして曆法を定めしめ又鯀（コン）をして洪水を治めしむ既にして舜有虞氏は帝堯の政を攝し禹鯀子の水を用ひて全く九州冀、兗、青、徐、楊、荆、豫、梁、雍の水土を平げ中央

に九官（司空、司徒、后稷、士、共工、虞、秩宗、典樂、納言）を設け地方に四嶽、十二牧を置き又巡狩、述職の制を建てたり帝堯死して舜位を繼ぎ蒲坂（山西省蒲州府）に都せしが自ら苗種を征して途に蒼梧（湖南省永州府）の野に死しぬ

夏の興亡

禹は位を繼ぎ（前二二〇年頃）安邑（山西省解州府）に都して國を夏と稱し能く帝舜の政を守りて益〻帝權を強くし遂に子孫世襲の基を開きしが諸侯に尚ほ不廷のものありて其曾孫相の時有窮の后羿（ゲイ）及其臣寒浞（サク）の亂相次て起れり相の子少康出でゝまた夏道を中興せしが後ち數世を經て履癸（桀と云ふ）に至り國政大に亂れて遂に商王湯に滅されぬ（前一七七〇年頃）

殷の興亡

商王湯は唐虞の際司徒たりし契（セツ）の後なり伊尹を用ひて先づ諸侯を服し次で夏を滅し亳（ハク）（河南省歸德府）に都して國を商と號せり商の世は王威屢〻衰へしが名君時〻出でゝ商道の復興をなし就中盤庚は都を殷（河南省河南府）に遷して國號を殷と改めたりされど武丁の後は殷道漸く衰へてまた興らず帝辛紂を云ふに至り微子、箕子、比干等の諫を聽かずして暴虐を恣にせしかば遂に周の武王に滅されぬ（前一一二〇年頃）

第二課　周の初世

周の興起

周の祖は唐虞の際后稷たりし棄なり其子孫は西戎の間に居りしが古公亶父（タンポ）に至りまた岐山に徙りて始て國を周と號せり其孫昌（文王）は呂尚（太公望）を用ひて仁政を施し多く諸侯を服して西伯となりしが尚ほ殷に事へたり然るに其子發は諸侯を率ひて遂に殷を滅し天子の位に卽きて鎬京（陝西省西安府）に都せり之を武王となす

周の極盛

武王は封建の制度を襲用して先代の後裔を興し又宗族、功臣を封ぜしが程なく死して成王立てり其叔父周公旦は政

を攝して殷の遺民の亂を靖め奄、淮夷、徐戎の反を平げ百般の制度を定め又洛邑（河南省河南府）に營みて諸侯を會し召公奭と共に益〻王室を輔けしかば成康二王の際は海内安寧にして威德外に及びぬ之を周室極盛の時となす

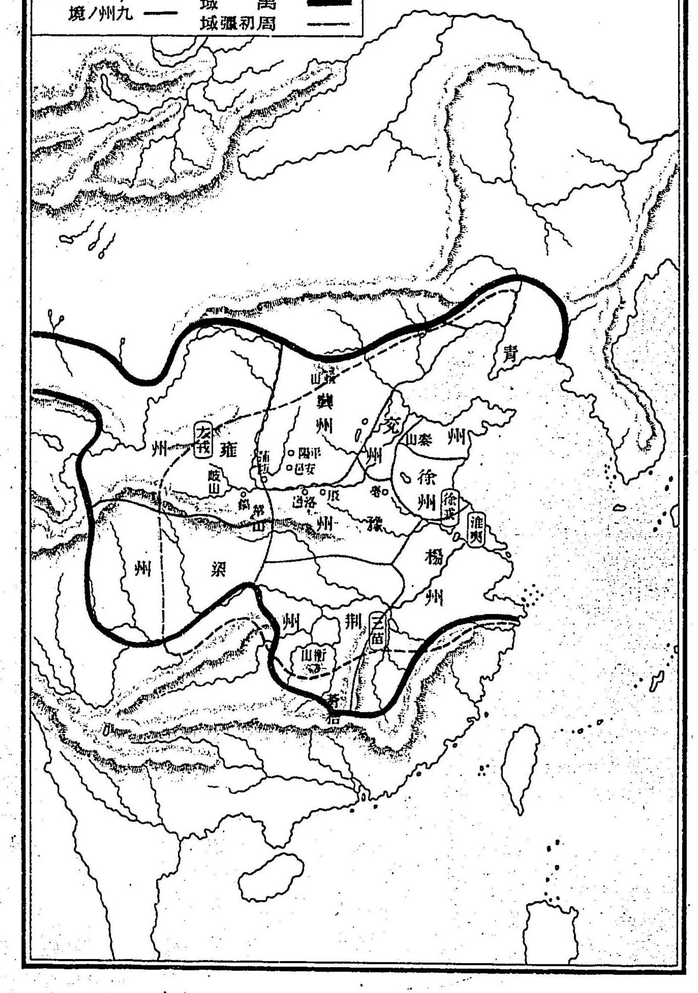
周の衰微

康王の後王道微しく缺け昭王は南に巡狩して歸らず穆王繼ぎて征伐を好み東は徐戎を伐ち西は犬戎を征して中外の心を失ひぬ後ち夷王に至りて王道益〻衰へ楚は王號を僭稱せしが其子厲王は之を顧みずして暴政を行ひしかば遂に國人に逐はれたり既にして其子宣王立ち仲山甫、尹吉甫等の賢能に任じて政を内外になし一時周道を中興せしかども其子幽王は無道にして犬戎に攻殺せられたり是に於て晉、衛、秦の諸侯は來援して犬戎を逐ひ平王を立てしが平王は鎬京の犬戎に逼るを憂ひて居を東都に徙しぬ（前七一一）

第一圖

唐虞三代圖

一　禹域
二　周初疆域
九州ノ境



之を周の東遷と云ふ

第三課　春秋の世

春秋

周室既に衰微して齊、楚、晉、秦、魯、衛、宋、燕、鄭、曹、陳、蔡の諸侯は擅に相攻伐し又戎狄は深く内地に侵入せしが覇者迭に興り内は諸侯を糾して王室を尊び外は戎狄を攘ひて一時又一方の平和を奏せり此時を稱して春秋の世と云ふ

齊の桓公

覇者の始めを齊の桓公となす桓公は管仲を用ひて尊王、攘夷を唱へ諸侯を鄄（山東省曹州府）に會して始て覇となり（前六七九年）山戎を攘ひて燕を救ひ狄を逐ひて衛を復し楚を伐ちて成王と召陵（河南省許州府）に盟ひ大に諸侯を葵丘（河南省歸德府）に會して相互の平和を約せり

宋の襄公

桓公死して齊亂る宋の襄公は之を定めて孝公を立て勢に乘じて覇たらむとせしが盂（河南省歸德府）の會に楚の成王に侮辱

せられ之と泓水（河南省歸德府）の邊に戰ひて敗死せり（前六三八年）

晉の文公

既にして晉の文公起り先づ赤狄を逐ひて周の襄王を位に復し次で楚を城濮（山東省曹州府）に破りて成王の勢を挫き遂に諸侯を踐土（河南省開封府）に會して覇業をなせり（前六三二年）是より百餘年間晉は世〻覇を中原に稱しき

秦の穆公

秦の穆公は能く國政を修めて晉の文公と東西に對立せしが文公の死後鄭を襲はむとして大に晉の襄公に殽（河南省河南府）に破られたり其後穆公は晉を伐ちて前辱を雪ぎ又由余を用ひて大に地を拓き遂に西方諸侯の伯となりぬ（前六二三年）

楚の莊王

楚の成王は南方の諸國を併せて齊、宋、晉と衡を爭ひしが莊王に至りて勢益〻強く洛水の上に至りて兵を周郊に觀し衆舒を平げて吳越と誓ひ晉の景公を邲（河南省開封府）に破りて威を中原諸侯の間に振ひぬ（前五九七年）

吳越の爭

其後ち吳に闔廬起りて伍員を用ひ楚を伐ちて大に勢を振ひしが越の勾踐と戰ひて敗死せり其子夫差は越を破りて勾踐を會稽山（浙江省紹興府）に窘しめ中原に入りて諸侯を黃池（河南省衛輝府）に會し始て覇を稱せり（前四八二年）時に越の勾踐は范蠡を用ひて頻に兵を練りしが遂に吳を滅して其地を併せ（前四七三年）更に中原に入りて覇となりき

官制

第四課　周の制度文物　孔子老子

周の制度は後世諸朝の模範にして官制は天、地、春、夏、秋、冬の六官を設け天官の大冢宰は諸政を統べ地官の大司徒は教化を掌り春官の大宗伯は祭祀、朝聘を掌り秋官の大司馬は兵馬を掌り秋官の大司寇は刑罰を掌り冬官の司空は百工を掌る又別に三公（太師、太傅、太保）三孤（少師、少傅、少保）を置きて有德を待て

封建の制

封建の制は諸侯を公、侯、伯、子、男の五等に分ち公、侯の地は方百里にして大國と稱し伯は方七十里にして次國と稱し子、男は方五十里にして小國と稱し方五十里以下は大國に隷して附庸と云ひ天子は方千里にして王畿と稱せり

田制

田制は井田の法を用ひ一井を九百畝となし其中百畝を公田となし其餘を八家にて平分し共に公田を耕して租稅に充つ租稅は公田の收穫、人民の力役及絹布の年貢とせり

兵制

兵制は田制に基き士、卒、牛、馬、兵車を徵發して軍を編成す一軍は一萬二千五百人にして天子は六軍、大國は三軍、次國は二軍、小國は一軍を置くを例とせり

刑法

刑法は墨、劓、刖、宮、大辟の五刑の外に刖、髡、鼻、肆等の刑を設けたり

學制

學制は大學を京師に置きて辟雍と稱し小學を地方に設けて庠序と云ひ教科は禮、樂、射、御、書、數の六藝にして禮樂を最も重くせり

孔老二子

周の制度は頗る整備せしが漸く虛儀虛禮に流れ且春秋の世に至り制度も敗壞して秩序、倫理は大に紊れしかば孔子、老子の二大家出でゝ時弊を匡さむとせり孔子は名を丘、字を仲尼と云ひ魯に出でゝ仁を說き禮樂を興して周道を復せむと欲し列國に歷遊して道を說きしが遂に志を得ず先代の詩、書、禮、樂を修整し春秋（魯の史記）を刪定して死せり（前四七九年）老子は姓を李、名を聃（タン）又耳と云ひ孔子とほゞ同時に楚に出で禮儀、制作を排して無爲自然を說きたり

第五課　戰國の世

戰國

春秋の末中原の諸侯は陪臣簒奪の禍に罹りて晉は韓、魏、趙の三國（三晉）となり（前四〇三年）齊は田氏の國となる時に楚は南に

蟠り秦は西に據り燕は東北の地を有ち新興の四國と共に王號を稱して強を爭ふ此時を稱して戰國の世と云ふ

秦の富強

戰國の初魏、楚は更々吳起を用ひて大に威を振ひ齊もまた頗る勢を張りしが秦の孝公は公孫鞅を用ひて法を變じ刑を修め耕稼を勸め戰士を重くし遂に富強を致して將に山東の諸國を制せむとす

蘇秦の合從策

是に於て蘇秦は燕、趙、韓、魏、齊、楚の六國に說きて合從の約を結ばしめ身は其長として六國の相印を佩びたり（前三三年）然るに程なく齊、魏其約に背きしかば從約は忽に破れぬ

張儀の連衡策

時に張儀は連衡を唱へて秦の惠文王に事へしが秦が楚、趙、魏、韓、燕の合從兵を破るに及び先づ魏に說きて秦に事へしめ次で楚を欺きて秦と連合せしめ遂に韓、齊、趙、燕に說きて皆な秦に服事せしめたり（前三一年）然るに程なく張儀の秦を去るに及び連衡もまた破れぬ

秦の一統

是より列國の交戰は益々滋く趙は胡地を略し中山を滅し秦は韓、魏、趙、楚を攻め齊は燕を略し宋を滅し燕は齊を破り胡を伐でり時に秦の昭襄王は范雎を用ひて遠交近攻の策を立て先づ白起をして大に趙を長平（山西省澤州府）に破らしめ次で益々韓、趙、魏、楚に迫りぬ周の赧王之を恐れて諸侯と從約せしが昭襄王は直に周を攻めて赧王を降せり（前二五六年）既にして政立ち李斯の策を用ひ窃に辯士を派して諸侯の君臣を離間せしめ然る後ちに王翦、王賁等の猛將を遣して之を伐たしめ次第に韓、趙、魏、楚、燕、齊の六國を滅して遂に全く天下を一統せり（前二二一年）

第六課　周末の學術

學術の興起

春秋の世周の制度の敗壞するに從ひ思想は漸く自由を得

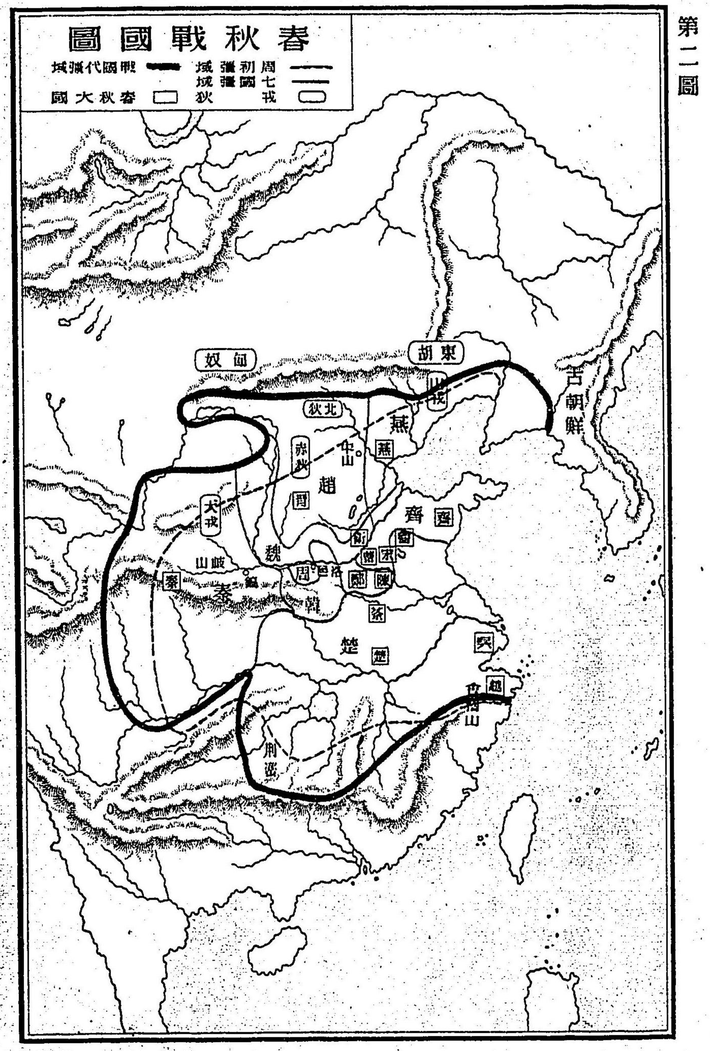
て智識の發達を促しゝが戰國の世に至り列國の競ひて賢才を聘し謀士を招くに及び人材は頻に輩出し學者は各〻新說を唱へ遂に文物の隆盛を極めぬ

儒家　儒家は孔子を祖述する學派にして支那北方の思想界を代表す孔子の後ち其孫孔伋子思出でしが孟軻は諸子横議し楊墨の說盛なる時に當り鄒に出でゝ專ら仁義を說き性善を唱へ又荀況は趙に出でゝ性惡の說を唱へたり

道家　道家は老子を祖述する學派にして支那南方の思想界を代表す老子の後ち列禦寇は鄭に出で莊周は蒙に起り共に無爲自然の論を發揚して一世を風靡せり

楊墨二家　楊家は楊朱の創めし學派にして自愛の說を唱へ又墨家は墨翟の開きし學派にして兼愛の說を唱へ共に盛に行はれて一時殆ど儒家の說を壓せり

第二圖



其他の學派

其他法家、兵家、陰陽家、縱横家等あり法家は管仲、李悝を祖とし法術を以て治國の道となし申不害は術を說き公孫鞅は法を說き韓非は法術を合せ說けり兵家は兵を講じ武を談じ孫武、吳起の徒最も名あり陰陽家は學說の源を易に導きて宇宙の現象と人事との關係を說くを主眼となし鄒衍、鄒奭の徒あり縱横家の祖は鬼谷子にして其門に蘇秦、張儀の徒出で其所說は一定せず唯權略を用ひて巧に列國の交渉を彌縫するにあり

詩文

詩文も學術の勃興と共に頗る發達し文章には諸子百家の書ありて皆な各〻特種の妙味を有し詩賦には楚に屈原出で離騷を作りて後世に模範を垂れたり

第七課　太古の印度

印度の開國

印度は支那と同じく宇内の舊國にして其開國は大約四千

年前にありたり當初アリア種は其故郷なるアムシル兩河間の地より次第に南下して幾多の部落を印度河の流域に建て自然力を崇拜してウェダを經典とせしが其後ち漸く東進して土民を驅逐し或は殺戮し或は奴隷となし遂に恒河（ガンジス河）の流域に幾多の小王國を建設せり（前一〇〇〇年頃）

種姓宗教

時に印度は社會の狀態を改めて四種姓の區別を生じ宗教もまた變じてブラーマン教となりたり四種姓はブラーマン族（僧）クシャトリア族（王）ワイシャ族（平民）スードラ（奴隷）にして次第の如く尊卑を立て極めて相互の關係を嚴峻にし各〻家格を世襲して相交雜するを得ず又ブラーマン教は萬有神教にしてブラーマー（梵天）ヴィシヌー（國天）マヘスヴァラ（大自在天）の三位一體の神を祭り萬物は皆な神に出でゝ復た神に歸すとなし又靈魂の輪廻を唱へて其解脫は專ら難業苦行にありと敎へ其聖書を

マヌの法典

ウパニシャットと云ふ

既にして印度の諸國大に亂れ敎化また漸く行はれざりしがマヌ出で諸國の舊慣を斟酌して法典を作るに及び諸國は之に據りて概ね政治を行ひしかば政敎また大に整ひて文化著しく進み哲理の研究の如きは最も盛となりたり然るにブラーマン種姓は漸く我意を擅にして敎化を布かず且自餘の種姓を壓せしかばクシャトリア種姓は先づ起りて之に抵抗し次でブラーマン種姓中にも之を攻擊するものあるに至れり是に於て釋迦牟尼（シャカムニ）はクシャトリア種姓より起り佛敎を興して一切衆生の濟度を圖りぬ

ブラーマンの專横

第八課　佛敎の興起

釋迦の出世

釋迦牟尼（シャカムニ）は實名を悉達（シッタルタ）と云ひカピラバスツール（ゴラクプル附近）王の子なり夙に人生の無常を感じて厭世の念ありしが遂に山

林に入り數年修行の後ち漸く法を悟り諸方を行脚して佛教を說きしが遂にクシナガラ（パトナの北カシア）に寂滅せり（前五四三年頃）

佛教は種姓の區別を排し因緣果報の理を說き人生の目的は種〻の修行に由り生死輪廻の苦界を解脫して涅槃（ニルヴァーナ寂滅）の境に入るにありと敎へたり

佛經の結集

時に中印度のマガダ國（ベハルの地）は頗る强大にして覇者の地位を占めしかば佛滅の年高弟マハカシャパは其王の保護を得て佛經の結集（第一回）をラーヂャグリハ（ベハルの西南）に行ひ其後ち百年を經てアナンは再び佛經の結集（第二回）をヴァイシャリ（パトナの南）に行ひたり是より佛教は次第に人心を風靡して遂にブラーマン教を凌駕せり

ダリウス及アレクサンドルの侵入

アリア種は曩に印度の西方に波斯を建てしがダリウスに至りて遂に西亞細亞を全く定め更に東征して北印度の地

を略取せり（前五一八年）其後ちマケドニアの王アレクサンドルは東征して波斯を滅し又西、北兩印度を服し（前三二七年）將に中印度に進まむとせしが兵士皆な之を厭ひしかば遂に軍を班してバビロンに死し其將セリュクス（條支）はシリア王となりて西、中兩亞細亞に君臨せり

モーリヤ朝及び佛教の弘布

時にチャンドラグプタはスードラ種姓に起りてマガダ國にモーリヤ朝を建て（前三二〇年）兵をセリュクスと交へしが後ち互に婚を通じて和を結びぬ其孫アソカに至りて中、北、西三印度を併せ厚く佛教を信じて佛經の結集（第三回）をパータリプトラ（パトナ）に行ひ（前二四四年）又佛徒を四方に派出して布教を圖りぬ是に於て佛教は四方に傳播して北は大夏（バクトリア）南はシムハ（錫蘭）西は埃及、シリアに及びしがアソカの死後佛徒は數派に分れて互に辯難し又王族は政權を爭ひて頗る紛亂

を極め漢初に至りてモーリヤ朝は遂に亡びぬ（前一九五年頃）

第九課　秦の一統　楚漢の攻爭

始皇の内政

時に支那は秦王政既に六國を滅して天下を一統し自ら始皇帝と稱して咸陽に都し海内を分ちて郡縣となし度量衡を一にし車軌、文字を同じくし又詩書百家の書を焚き儒生を坑にし以て制度、思想の統一を企て又屢〻海内を巡狩して人心の威壓を圖れり

始皇の外征

始皇帝は蒙恬を遣し北の方匈奴を攘ひて河南（鄂爾多斯）の地を收め臨洮（タウ）、遼東の間に萬里の長城を修築し又兵を南方に出して南越の地を略定し遂に版圖をして東は朝鮮に至り西は臨洮に及び南は安南に達し北は陰山に及さしめぬ

秦末の爭亂

されど秦の政刑は嚴厲にして賦役はまた繁苛なりしかば海内漸く秦を怨み始皇帝死し二世皇帝立ちて趙高權を專にするや陳勝、吳廣は蘄（安徽省鳳陽府）に劉邦は沛（江蘇省徐州府）に又項梁、項籍は吳（江蘇省蘇州府）に起れり項梁は劉邦と合し范增の說に從ひ楚の懷王を立てゝ民望に從ひしが秦の將章邯に攻殺せられしかば項籍は章邯を鉅鹿（山東省順德府）に破り劉邦は直に秦を衝きたり時に二世皇帝は趙高に弑せられて公子嬰（エイ）立ちしが遂に出でゝ劉邦に降りぬ（前二〇六年）

楚漢の攻爭

時に項籍は關中に來りて擅に諸將を分封し且懷王の約に背き劉邦を關中に封ぜずして漢中を分け與へたり劉邦は恨を呑みて國に就き蕭何、張良、韓信を用ひて竊に時機を窺ひしが項籍は咸陽を屠り秦王を殺し陽に懷王を尊みて義帝となし自ら西楚の霸王と稱して彭城（江蘇省徐州府）に都せり會〻東北の地亂れ項籍が自ら之に向ふに際し劉邦は先づ關中を定め次で項籍を伐ちしが睢水、滎陽（河南省開封府）成皋（同上）に

連敗して廣武（河南省開封府）に相持せり時に項籍は助少く食乏しきを以て劉邦と天下の中分を約し兵を罷めて東歸せむとせしに劉邦は約に背きて追擊し之を垓下（安徽省鳳陽府）に破りて遂に帝業を成せり（前二〇二年）之を漢の高祖となす

第十課　漢の初世

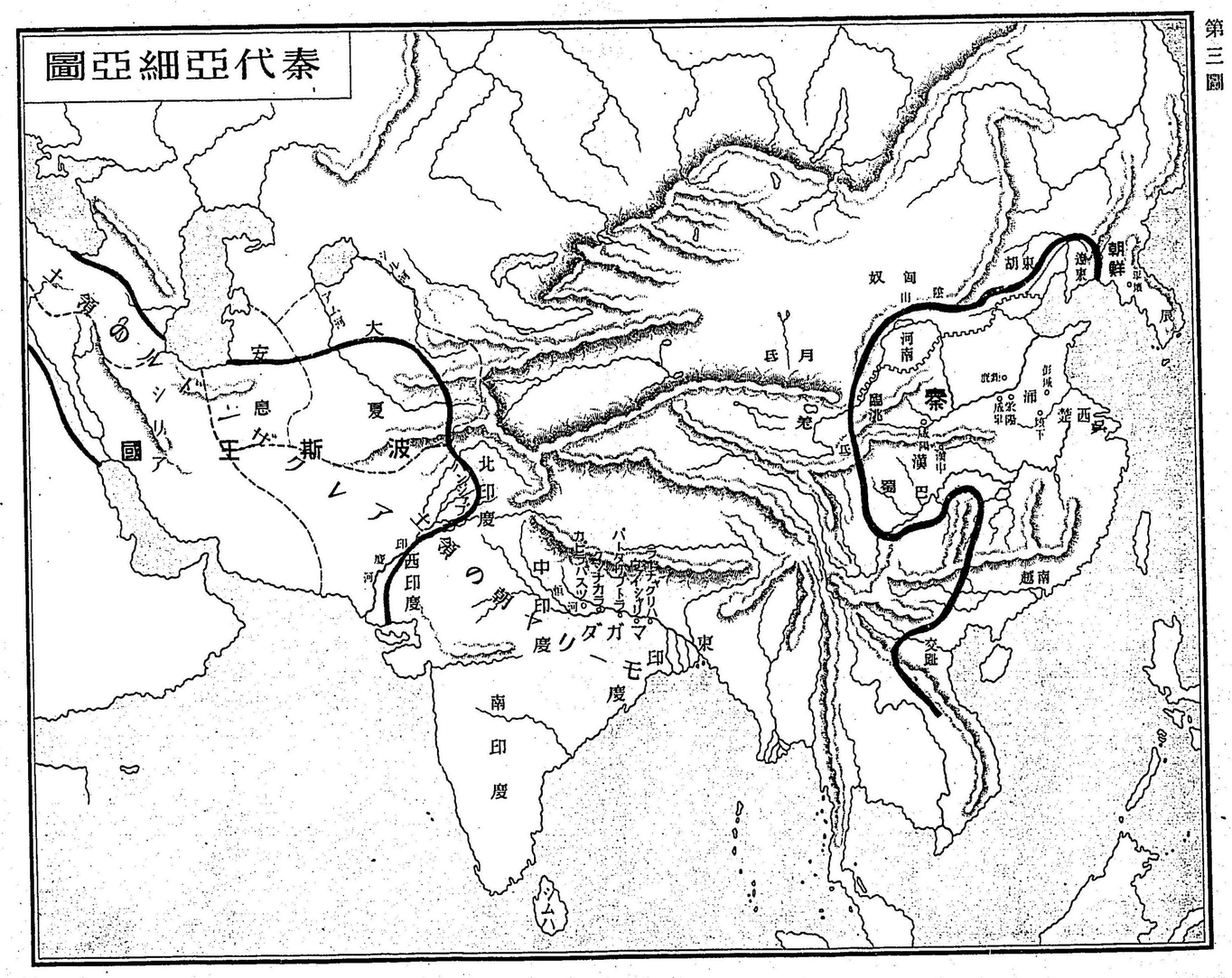
高祖の創業

漢の高祖は都を長安（陝西省西安府）に定め概ね秦の舊に依りて制度を立てしが其繁苛に懲りて簡易を主とし又其孤立に鑑みて封建郡縣の二制を混用せり高祖は始め楚、梁、淮南、趙、燕等異姓の諸侯を封ぜしが漸く之を剪除して其地に齊、楚、代、趙、吳、淮南等同姓の諸侯を封ぜり

高祖の外交

時に匈奴の勢頗る強く冒頓單于（單于は天子と同じ）は南侵して晉陽（山西省太原府）に至れり高祖因て親征し白登城（山西省大同府）に至りしが却て匈奴に圍まれ陳平の謀に由りて僅に遁るゝを得次で

第三圖



劉敬の策を用ひて之と婚を結び且財物を贈りて偏に其歡心を買ひたり又南越王趙佗の自立を釋して更に之を封冊し以て南邊の患を防ぎたり

呂氏の亂

高祖死して惠帝立ち呂太后窃に政を執りしが惠帝死するに及び親ら朝に臨みて制を稱し多く呂氏を立てゝ王とせり是に於て齊王劉襄は呂太后の喪に乘じ劉氏の諸侯と共に外にありて兵を擧げ陳平、周勃は内にありて之を助け遂に呂氏を除きて文帝を迎立せり

文帝の治

文帝は性仁儉なるを以て刑律を寛にし農桑を勸め又屢〻田租を免し專ら民力の休養を計りしが外は匈奴が北邊を掠め又南越が帝號を稱し内は諸王の勢往々宗家を凌ぎたり賈誼、鼂錯は上書して内外に對する策を說きしかど文帝は悉く其議を容れずして外は匈奴と和親し又南越を慰諭

し内は齊、趙、淮南を各〻數國に分割せしのみ

七國の亂

文帝死し景帝繼ぎて鼂錯の勸に從ひ罪に托して楚、趙、膠西、吳の地を削りしかば吳王劉濞は怒りて先づ兵を擧げ（前一五四年）膠東、膠西、菑川、濟南、楚、趙も皆な之に應ぜり是を七國の亂と云ふ景帝は文帝の遺戒に從ひ周亞夫を將として之を征定し痛く諸王を抑へて後患を斷ちたりされど景帝は匈奴に對しては尙ほ和親を結びぬ

第十一課　漢武帝の業　四夷の服屬

武帝の業

景帝死して武帝立ち（前一四〇年）內は衛綰、董仲舒の議を納れ百家の說を排して儒學を興し以て人心の標準を一にし又諸王に其子弟の分封を許して自ら其勢力を削り以て中央の權力を重くし又雄材大略の資と國內一統の勢とを以て力を拓邊に盡せり

匈奴の放逐

武帝は匈奴の患を除かむと欲して軍臣單于と戰を開きたり衛青は匈奴を破りて河南の地を取り又霍去病は其西邊を伐ちて河西の地を取りしが後ち匈奴の衰ふるに及び衛青、霍去病は大に之を破りて遠く單于を漠北に逐ひぬ（前一一九年）

西域の交通

武帝は匈奴を伐つに當り西域に通じて其右臂を斷たむとせり西域は匈奴の西方に當る地方一帶の總稱にして樓蘭（羅布淖爾の南）車師（吐魯番）焉耆（喀喇沙爾）龜茲（庫車）于寘（和闐）莎車（葉爾羌）疏勒（喀什噶爾）烏孫（伊黎）等は葱嶺以內にあり又康居（キルギス荒原）大宛（フェルガナ）大月氏（アムの流域）大夏（バクトリア）安息（パルチア）罽賓（カシミール）身毒（印度）等は葱嶺以外にあり張騫は武帝の命を奉じて大月氏に使し途にして一旦匈奴に捕はれしが遂に大宛、康居、大月氏等を經て還り後ち匈奴の衰ふるに及びまた烏孫、大宛、康居、大月氏、安息、身

毒に使せり（前一一五年）既にして武帝は樓蘭、車師を伐ち烏孫と結び大宛を征し大に漢威を西域に張りぬ

東南二方の征定

武帝は匈奴を伐つに先ち南方を經略して東甌（浙江省の地）を江淮の間に徙し閩越（福建省の地）を繇、東越に分ち夜郎、邛、冉駹（ボウ）の西南夷（雲南、四川、貴州三省の地）を定めしが匈奴を漠北に逐ふに及び南越を滅し（前一一一年）東越を平げ滇（テン）、白馬等の西南夷を定めたり時に朝鮮王右渠が漢の邊吏を殺しゝかば武帝はまた朝鮮を攻滅して其地を併せたり（前一〇八年）

第十二課　漢宣帝の業　王氏の簒奪

宣帝の業

武帝死して昭帝立ち霍光は遺詔に依りて政を輔け拓邊の政を改めて專ら民力の休養を計りしが尚ほ兵を出して匈奴を伐ち烏桓を征し又樓蘭の王を更立せり宣帝繼ぎ内は魏相、丙吉、黃霸、于定國等の賢臣を用ひて民治を熾にし外は

武帝の雄圖に傚ひて國威を匈奴、西域に耀せり

匈奴西域の服從

宣帝は匈奴が烏孫を攻むと聞き諸將を遣して大に匈奴を破り又車師の叛を定め莎車の王を更立し西羌を鎭定し始て都護を烏壘城（策特爾）に置きて西域諸國を督察せり（前六〇年）既にして匈奴に五單于の爭起り呼韓邪、致支の二單于は匈奴を分領せしが呼韓邪單于は漢に降りて藩臣と稱し（前五一年）致支單于もまた使を漢に通ぜり

王氏の簒

漢は威光を外に耀しゝかど宦官、外戚の禍を内に生ぜり宣帝死して元帝立ち宦官石顯等事を用ひて頗る威福を擅にせしが成帝繼ぐに及び石顯等を斥け外戚王鳳を擧げて政を輔けしめぬ是より王氏は漸く勢を振ひて王莽に至り平帝を擁立して自ら宰衡と稱し次で之を弑して孺子嬰を立てしが程なく自立して國號を新と稱せり（八年）

王莽の滅亡

王莽は天下の耳目を一新せむと欲し周制に倣ひて諸制を改めしが法令煩多にして賦斂また過重なりしかば人心忽ち離畔し匈奴、西域もまた邊を擾せり是に於て赤眉（樊崇）の兵は莒（山東省青州府）に起り綠林（下江、新市の二兵に分る）平林の兵は荆州に起りたり漢の宗室劉演（シン）、劉秀の兄弟は兵を春陵（ヒヤウリヤウ）（湖北省襄陽府）に起し先づ新市、平林の兵を合せて同族劉玄を立て次で王莽の軍を昆陽（河南省南陽府）に破りて大に威名を收めたり然るに劉玄は劉演を忌みて之を殺し更に別將を長安に遣して王莽を誅滅せり（二三年）時に劉秀は河北の地を徇へしが諸將の勸に從ひ帝位に卽きて洛陽に都せり（二五年）之を後漢の光武となす

光武の中興

第十三課　後漢の初世　西域の叛服

光武は鄧禹、馮異等を遣して赤眉を長安に降し河北、河南、關中の地を定めしが公孫述は蜀に隗囂（クワイガウ）は隴西に竇融（トウ）は河西に據りて皆な後漢に服せず光武因て隗囂を破り公孫述を滅し竇融を降し又交趾の叛を定めて遂に海内を一統し更に意を内治に注ぎて政權を王室に收め大に儒學を興したり

明帝の外交

光武は外國の關係を避けしが明帝は其方針を改め屢〻兵を塞外に出せり時に匈奴は既に南北に分れ南匈奴は後漢に内附し北匈奴もまた和親を求めしが明帝は南、北匈奴の相通ぜむを憂ひ先づ度遼營を五原に置きて之を沮み次で耿秉、竇固に命じて北匈奴を伐たしめ伊吾盧（ハミ）の地を取り（七三年）時に班超は西域に使して鄯善（ぜんらん）于寘を降し疏勒を定めしかば西域諸國は皆な匈奴と絶ちて後漢に通じ又佛教、僧侶も公然後漢に入り次で竇固等が西征して車師を定むるに及び明帝は再び西域の都護を車師に置きぬ（七四年）明

章帝の外交

帝死して章帝立つに及び西域諸國は叛し北匈奴は來寇せしが班超は兵を請ひて疏勒、莎車、龜茲等を伐ち威を西域に振ひしかば大月氏、安息等は皆な使を後漢に通じ北匈奴も頗る衰耗して其南邊の諸部は多く後漢に降りぬ（八七年）章帝死して和帝立つに及び竇憲は北匈奴を伐ちて遠く之を西方に逐ひ（九三年）又班超は西域都護となりて龜茲に居り其部下甘英を太秦（羅馬を指す）に遣しゝが甘英は條支に至り遂に達せずして歸れり

邊境の縮小

後ち班超は東歸し任尚の之に代るに及び撫御其方を失ひて西域また安からず且南匈奴、西羌、烏桓、鮮卑、高句麗等も皆な叛きたり順帝に至り班勇（班超の子）はまた西域諸國を復せしか葱嶺以外の諸國は絶えて通ぜず唯印度、太秦が海路を經て日南（安南の南部）の境に至ることあるのみ（一六六年）

第十四課　後漢の末世

外戚宦官の禍

後漢はまた外戚、宦官の禍を生せり和帝の時外戚竇氏驕横なりしかば宦官鄭衆は帝を助けて之を斥け安帝の時外戚鄧氏政を執りしが外戚閻氏は宦官と之を斥けて事を用ふ宦官孫程等は閻氏を斥けて順帝を擁立せしが外戚梁氏また專横を極めしかば宦官單超等は桓帝を助けて之を除きぬ是に於て宦官は遂に威勢を收めて朝廷に跋扈せり

黨錮

時に陳蕃、李膺等氣節を尚ぶ士は宦官を憎み大學の學生も之に應じて宦官を貶議せしかば宦官は之を畏れて李膺等を黨人となし桓帝に誣告して其徒を獄に下せり然るに靈帝立ちて竇武、陳蕃、李膺等は朝に列し勢に乘じて宦官を誅せむと謀りしが宦官は之を探知し靈帝に誣告して竇武、陳蕃、李膺等數百人を悉く死徒廢錮せり（一六八年）

宦官の誅滅

既にして黄巾の賊張角は鉅鹿に起り一八四年所在を燔刼せしが宦官は尚ほ威福を恣にせり會〻靈帝死して劉辨立ち外戚何進は袁紹と謀りて密に董卓の兵を河東より召し宦官を誅せむとせしに謀泄れて宦官に殺されたり袁紹は兵を勒して悉く宦官を誅せしが董卓來り恣に獻帝を立てしかば關東の諸將と共に董卓を伐たむとせり董卓は獻帝を擁して長安に移りしかば諸將は自ら乖離して互に相圖り袁紹、

後漢の滅亡

袁術、孫策、曹操、劉備等は各地に割據せり

既にして董卓は王允に殺され獻帝はまた洛陽に還りしかば曹操は之を許に迎へて天下の政權を握り袁術、袁紹を滅し烏桓を平げ悉く河の南北を併せしが孫堅、劉備と赤壁湖北省武昌府に戰ひて大敗せり二〇八年是より孫權は江南の地を併せ劉備は諸葛亮を用ひて巴、蜀、漢中を定めぬ既にして曹操の子曹丕は獻帝の位を簒ひて洛湯に都せり之を魏の文帝となす二二〇年劉備も帝位に卽きて成都に都せり之を蜀の昭烈帝となす後ち孫權も帝號を稱して建業江湖省江寧府に都せり之を吳の太帝となす是に於て三國鼎立の形勢となれり

匈奴の強盛

第十五課　匈奴の盛衰

匈奴は土耳其種に屬してもと獫鬻（クンイン）又玁狁（クンイン）と稱し蒙古地方に居りて常に漢種の患をなしゝが頭曼單于は秦の始皇の威を恐れて一旦漠北に徙れり既にして冒頓單于出で東は東胡を滅し西は月氏を逐ひ北は丁零を服し南は河南の地を復して勢頗る強く漢の初に南侵して先づ高祖を白登城に圍み次で之と姻親を結びたり冒頓單于の後老上、軍臣の二單于相繼ぎ皆な南下の懲を止めずして屢〻漢の邊境を侵しゝが武帝の征伐を蒙りて軍臣單于は河南の地を失ひ

又伊稚斜單于は河西の地を失ひしより次第に北退して遂に遠く漠北に徙れり

匈奴の內亂

壺衍鞮單于に至り烏孫を攻めしか漢、丁零、烏桓、烏孫に四面より侵されて大に勢を失へり既にして匈奴に內訌を生じ五單于並び立ちしが程なく呼韓邪、致支の二單于は匈奴を分領せり然るに呼韓邪單于は致支單于に攻められて漢に內附し致支單于もまた使を漢に通ぜしが呼揭、丁零、堅昆を併せてまた漢に背き康居に走りて西域都護甘延壽に滅されたり（前三六年）

匈奴の衰微

其後ち匈奴は王莽の冷遇を怒りて西域諸國を略せしが蒲奴單于に至り匈奴の南部は別に呼韓邪單于を立てたり（五一年）是より匈奴は南北に分れて相攻め南匈奴は後漢に內附して居を河南の地に徙し北匈奴もまた使を通ぜしが後漢、南匈奴、丁零、鮮卑、西域諸國に攻められて勢大に衰弱し於除鞬單于立ちて蒲類海（巴爾庫勒）に居りしが遂に南匈奴、後漢に攻滅せられたり又南匈奴は後漢の監督を受けて後漢の末に至り於扶羅單于に從ひて太原の地に徙り五部（左、右、前、後、中）に分れて各〻師を立て皆な姓劉氏を冒しゝが晉初に至り鮮卑、氐、羌と共に起りて中國を攪亂せり

第十六課　烏桓鮮卑の盛衰

烏桓の盛衰

烏桓、鮮卑は共に東胡の後にして蓋し通古斯種に屬せり秦漢の際東胡は頗る强大なりしが匈奴の冒頓單于に破られ其餘衆は東走して一部は烏桓山（內蒙古の東部）を保ち一部は鮮卑山（內蒙古の東部）を保ち因て其號となし皆な匈奴に從ひたり烏桓は漢の昭帝の時漸く勢を作して匈奴に敵せしが漢の征伐を蒙りて之に降附し後ち頻に北匈奴を破りて地を拓きた

り後漢の末に至り蹋頓出でゝ烏桓を統べ袁紹を助けて勢を振ひしが曹操と戰ひて遂に敗滅せり（二〇七年）

鮮卑の盛衰

鮮卑は勢容易に振はざりしが後漢の初め北匈奴の衰耗するに及び頻に之を破りて其地に徙り頓に強大となり屢〻後漢に叛服せしが桓帝の時檀石槐出でゝ庭を彈汗山（内蒙古の東部）に立て北は丁零を拒ぎ南は後漢の邊を侵し東は扶餘を退け西は烏孫を擊ちぬ其後ち獻帝の時に至り軻比能出で能く諸部を威制して頗る強盛なりしが魏の將王雄に攻殺せられて部衆遂に分散しぬ（二三五年）

鮮卑の支族

時に鮮卑各部の大人に慕容、拓跋、宇文、段、禿髮、乞伏等ありて慕容、拓跋の二氏最も強し慕容氏は初め遼西に居りしが後ち遼東に徙り又拓跋氏は初め北荒に居りしが後ち匈奴の故地に徙りて居を盛樂（山西省大同府）に定めたり晉初に至り鮮卑

第五圖

三國晉初圖

三國の疆域
晉初の疆域

東京市神田區表猿下町小學館印刷所發行

の各部は皆な一時に蜂起して中國を攪亂せり

氐羌

氐、羌は共に圖伯特種に屬して羌は青海の地に居り氐は其東南の地に居り漢の初め匈奴に屬せしが後ち漢に從へり後漢に至り氐、羌は多く關中の地に雜居し燒當羌、先零羌は頻に後漢の邊境を擾しゝが晉初に至り皆な蜂起して中國を抄掠せり

第十七課　三國の鼎立

三國の交戰

後漢既に亡びて魏、蜀、吳の三國並び立ちしが吳、蜀は概ね連合して魏に當れり蜀の昭烈帝は曾て吳が關羽を攻殺せしを怒り自ら吳を伐ちしが大に陸遜に夷陵（湖北省宜昌府）に破られ程なく死して後帝立ち諸葛亮政を輔けて好を吳に修め吳もまた蜀と和せしかば魏の文帝は屢〻吳を伐ちしが遂に志を得ずして死せり

諸葛亮の北伐

時に蜀の諸葛亮は既に苗蠻を征服して後顧の憂を除きしかば自ら魏を伐ちて祁山（晉肅省鞏昌府）を攻め陳倉（陝西省鳳翔府）を圍みまた祁山を攻めしが常に糧食に窮して兵を還せり既にして諸葛亮は大に軍備を整へ吳の太帝を誘ひて同時に魏を伐ちしが吳の兵は明帝に擊退せられ諸葛亮は司馬懿と五丈原に相持して死せり（二三四年）

魏の東征

後漢の末公孫度（タク）は遼東の地を併せしが公孫康繼ぎ高句麗を伐ちて勢漸く強し公孫淵に至りて燕王と稱し吳に通じて魏を侵しゝかば明帝は司馬懿を遣し高句麗と力を合せて遂に公孫淵を攻滅せり明帝死して曹芳立つに及び毋丘儉は高句麗を伐ちて丸都城（平安道楚山府）を降せり

魏蜀の滅亡

時に魏の司馬懿は既に政權を握りて專ら家門を營立せしが司馬師、司馬昭の兄弟相繼ぎて益〻威權を振ひ恣に廢立をなして遂に元帝を立てぬ時に司馬昭は蜀の姜維が屢〻魏を侵すを厭ひしが遂に鄧艾（ガイ）、鍾會を遣し蜀を伐ちて後帝を降せり（二六三年）是より司馬昭の威望益〻高く其子司馬炎繼ぐに及びて遂に元帝の位を簒ひたり（二六五年）之を晉の武帝となす

吳の滅亡

吳は太帝の死後依然江東を有ちしが孫皓に至り德政を修めざりしかば人心漸く離畔せり晉の武帝は之に乘じて杜預、王濬（シン）を遣し吳を伐たしめて遂に孫皓を降せり（二八〇年）是に於て三國皆な亡び海内また一統の治に歸しぬ

第十八課　晉　五胡十六國（前）

八王の亂

武帝は初め意を政治に注ぎしが吳を定めてより漸く遊宴に耽りてまた經國の遠謀をなさゞりき惠帝立ち賈后政を恣にして汝南楚の二王を殺し又楊太后、太子遹（ユツ）を弑せり趙

王は兵を擧げて賈后を殺し次で帝と稱せしかば齊王は河間、成都の二王と共に趙王を誅して惠帝を位に復せり然るに諸王は相乖離し長沙、東海の二王は新に起り互に政權を爭ひて殘賊を極めたり之を八王の亂と云ふ

五胡の蜂起

時に匈奴、羯（匈奴の一部）鮮卑、氐、羌の五胡は晉の內亂に乘じて一時に蜂起し匈奴の劉淵は左國城（山西省汾州府）に據りて漢王と稱し（三〇四年）羯の石勒は之に從ひたり氐の李雄は成都に據りて成帝と稱し鮮卑の慕容廆は大棘城（盛京省錦州府）に據りて大單于と稱し又拓跋猗盧は上谷（直隸省宣化府）の北に據りて可汗と稱し其他氐の符洪、羌の姚弋仲等もまた起りぬ

晉室の中絕

晉は惠帝既に死して懷帝立ちしが劉淵は帝と稱して平陽に都し頻に晉に迫りたり劉淵死して劉聰繼ぐに及び石勒は東海王を破り劉曜は懷帝を洛陽に執へ又新に立ちし愍

第四圖

漢代亞細亞圖

東晉の形勢

帝を長安に降せり（三一六年）

是に於て元帝は位に建康（建業）に卽きて江東を保てり之を東晉と云ふ王導、庾亮等の賢臣ありて元帝を輔けしが王敦、蘇峻の叛亂相續きて東晉の勢容易に振はず康帝に至り庾翼は頻に江北の回復を圖りしかど成らずして死し穆帝に至り桓溫は軍事を統べて遂に漢（成と同じ）を滅し（三四七年）やゝ東晉の勢を振はしめたり

江北の諸國

漢は劉曜繼ぎ長安に都して國號を趙（前趙）と改めしが石勒は襄國（直隸省順德府）に自立して國を趙（後趙）と號し次で前趙を滅して北方に雄視せり（三二八年）既にして石虎立ち都を鄴（河南省彰德府）に移して兵を四方に出しゝが慕容皝は既に國を燕（前燕）と稱して高句麗を伐ち後趙を破り又張駿は河西に據りて後趙を破りたり既にして後趙亂れ冉閔は簒立して魏帝と稱し（三五〇年）

符健は關中を定めて國を秦（前秦）と號し前燕の慕容儁は魏を滅して關東を定め姚襄は河洛の間に據り張重華は國を涼（前涼）と號し拓跋什翼健は代王となりて勢を塞外に振ひたり

第十九課　晉　五胡十六國（後）

東晉の北伐

時に後趙既に亡びて北方大に紛亂せしかば東晉の桓溫は之に乘じ自ら前秦を伐ちて符健を長安に圍み又姚襄を破りて洛陽を復し大に威權を中外に振ひたり既にして桓溫は前燕を伐ちしが敗績して南に歸り頗る威權を專にして死せり時に孝武帝立ち謝安政を輔け謝玄等を擧げて北方を鎭定せしめたり

淝水の戰

前秦は符堅立ち王猛を用ひて頗る強く遂に前燕、前涼、代を定めて北方を一統し（三七七年）更に高句麗、新羅、西域諸國を服せり是に於て符堅は東晉を滅さむと欲し自ら大軍を率ひて南征せしが大に淝水（安徽省鳳翔府）に擊破せられたり（三八三年）是より北方また大に亂れて後燕、後秦、西燕、西秦、後涼、代先づ起り後秦の姚襄は符堅を執へて關中を定め後燕の慕容垂は西燕を滅して關東を平げ又代の拓跋珪は國號を魏（後魏）と改め後燕を破りて平城（山西省大同府）に都し帝と稱せり之を道武帝となす（三九八年）時に南燕、西涼、北涼、南涼また新に起りしが後秦は後涼を併せて大に勢を振ひしかば西涼、南涼、北涼、東晉皆な好を之に通ぜり

江北の分裂

東晉の滅亡

東晉は淝水の戰後國政漸く亂れ桓玄は安帝の位を簒ひて好を後秦に通ぜしが劉裕は之を誅して安帝を位に復し次で南燕、後秦を滅し大に威名を加へて遂に恭帝の位を簒ひたり（四二〇年）之を宋の武帝となす

後魏の强勢

北方には夏、北燕は新に起り西秦は南涼を滅し北涼は西涼

を併せしが後魏の勢益〻盛にして太武帝は柔然を伐ち西秦を滅し夏を破り又北燕、北涼をも滅して遂に全く北方を一統せり（四三九年）

五胡十六國

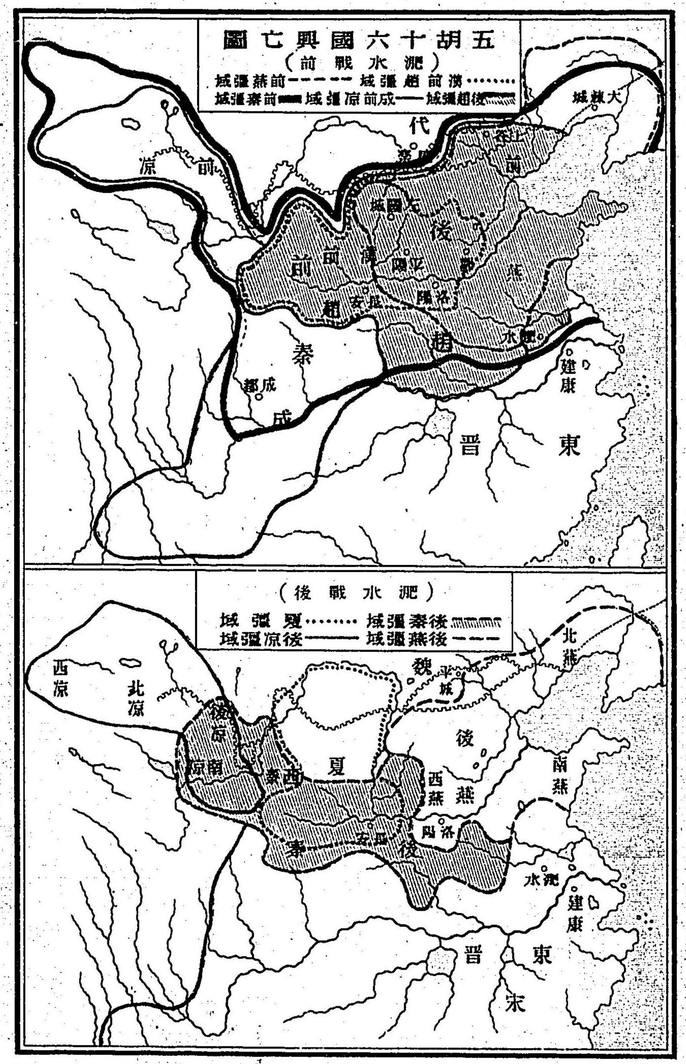
八王の亂後百三十餘年の間匈奴、羯、鮮卑、氐、羌の五胡は內地に跋扈し漢（又前趙）北涼、夏（以上匈奴）後趙（羯）前燕、後燕、西秦、南燕、南涼（以上鮮卑）成（又漢）前秦、後涼（以上氐）後秦（羌）前涼、西涼、北燕（以上漢種）の十六國と魏（漢種）西燕（鮮卑）の二國とは前後江北に興亡せしが支那は遂に宋、後魏の二大國となり淮河、漢江を界として南北に對立せり

第二十課　東方諸國（朝鮮、三韓、扶餘、高句麗、百濟、新羅）の古史

古朝鮮

古朝鮮は通古斯種に屬す周の初殷の王族箕子は遼河以東の地に國を建てゝ朝鮮と號し（前一一二二年頃）子孫相承けて箕準に至れり然るに燕の亡民衛滿は箕準を逐ひて自立し（前一九四

第六圖



年漢の外臣と稱して平壤に都せしが其孫右渠に至り漢の邊吏を殺して武帝に滅され古朝鮮の地は悉く漢に入りぬ

前一〇八年

三韓及び新羅

朝鮮半島の南部には韓種居りて馬韓、辰韓、弁韓の三部をなせり朝鮮王箕準は衛滿に逐はれ馬韓に入りて其王となり辰韓、弁韓を兼治して之を子孫に傳へしが漢の末朴赫居世は辰韓に起りて新羅の國祖となり前五七年次で弁韓を威服したり

扶餘及び高句麗百濟

扶餘は蓋し通古斯種に屬し滿州の松花江畔に居りしが漢の末扶餘王の子朱蒙は南下して沸流水（鴨綠江の上流）の附近に高句麗國を建て前三七年朱蒙の次子扶餘溫祚は馬韓の一部を取りて百濟國を建て前一八年次で箕氏を滅し全く馬韓を併せたり是に於て朝鮮半島には高句麗、百濟、新羅の三國並び立て

三國の形勢

り

高句麗は國初以來屢〻支那と交渉を起し後漢、魏の間遼東の地を侵して後漢の遼東太守公孫度、魏の幽州刺史毋丘儉と相爭ひたり百濟は勢猝に振はざりしが肖古王以後屢〻新羅、靺鞨と相爭ひ新羅は百濟の難あるに係らず國礎は益〻固くなりしが昔奈解に至り日本の神功皇后の親征を蒙りて屬國となり二〇年百濟の肖古王も恐れて日本に服屬せむことを請ひぬ爾後日本は弁韓の故地に任那府を開きて新羅、百濟を鎭撫せり

高句麗百濟

高句麗は晉の内亂に乘じて遼東を侵し屢〻慕容廆と戰ひしが故國原王に至り慕容皝に破られて遂に臣を前燕に稱し二三四年更に南下して百濟を侵せり百濟の近肖古王は高句麗を破りて都を北漢山京城に遷し又好を東晉に通じて佛敎を傳來せしが高句麗は小獸林王立ち好を前秦に通じてまた佛敎を傳來せり三七二年既にして高句麗に廣開土王出で後燕、日本、百濟と爭ひしが長壽王繼ぎて百濟の蓋鹵王を攻殺し好を宋、後魏に通じて勢頗る盛なり是に於て新羅は百濟と結び百濟は好を宋、日本に通じて共に高句麗に當りぬ

第二十一課　大月氏及び印度　佛敎の東流

安息大夏の興起

周末に當りシリアの勢衰へて安息は先づ波斯の故地に起り前二五年大夏は次で嬀水アムの流域に起りしが安息は屢〻シリアを破り又大夏を侵せり大夏は北印度を服せしが安息に破られ次で大月氏に滅されたり前一二六年

大月氏の建國

大月氏は月氏にして圖伯特種に屬す秦、漢の際勢を河西の地に振ひしが匈奴に逐はれて伊黎の地に走り又烏孫に破

られて嬀水の邊に走り遂に大夏を破りて大月氏國を建て（前一八二年頃）更に兵を用ひて中亞細亞、北、西兩印度及び天山南路を併せたり

カニシカ王

印度はモーリヤ朝の亡後マガダの國勢また振はざりしが南印度にアンドラ朝興り漸く勢を張りて遂に中印度を併せたり（前二六年）然るに諸王は皆なブラーマン敎を崇奉せしかば佛敎は漸く勢を失ひて遂に大月氏に移りたり時に大月氏はカニシカ王出で（五六年）深く佛敎に歸依して佛經の結集（第四回）を北印度に行ひアスヴァゴシャ（馬鳴）等の名僧多く來集して遂に佛敎を北印度に隆興せり

佛敎の弘布

佛敎は是より南、北二派に分れ南派はシムハより後印度、南方諸國に流傳し北派は北印度より中亞細亞、天山南路、支那に流布せり支那は漢初既に佛敎を密傳せしが後漢の蔡愔が明帝の命を奉じて大月氏に至り佛經、佛像及び迦葉摩騰、竺法蘭の二僧を得て歸來せしより（六七年）佛敎漸く流行し後漢の末より三國を經て六朝に至り其勢益〻盛になれり

グプタ朝

大月氏はカニシカ王の死後國勢漸く衰へ印度はグプタ朝新にカニヤクブジャ（カノージ）に興り（三一九年）中、南兩印度に君臨せしが大月氏を破りてまた北印度を併せたりされど諸王は皆なブラーマン敎を信奉せしかば佛敎は益〻勢を印度に失ひぬ

波斯の興起

安息の羅馬と相爭ひて勢を損するに及びアルデシルは之を滅し（二二六年）サッサン朝の波斯國を興してゾロアストル敎を奉じたり是より波斯は羅馬を侵し又大月氏を破りて遂に雄を西亞細亞に稱せしが北の方嚈噠（エフタリツ）とまた屢〻兵を交へたり（四二〇年以來）

嚈噠の興起

嚈噠は蓋し土耳其種に屬し金山附近の地より南下して大月氏の地を併せ又グプタ朝を破りて北、西兩印度を取り西は波斯と爭ひ東は柔然と戰ひて好を後魏に通ぜり

第二十二課　宋、齊、梁、後魏

宋後魏の交戰

支那は宋、後魏の二國南北に對立して後魏は西域諸國に通じ又屢〻柔然を伐ち宋は林邑を服し又扶南（林邑の南）闍婆（爪哇）に通ぜり宋の文帝は後魏の柔然を伐つに乘じて北侵せしが後魏の太武帝に逆擊せられて大敗せり是より宋の勢漸く衰へ明帝の時後魏は淮北、淮西の地を奪ひ順帝の時蕭道成は宋を簒ひたり（四七九年）之を齊の高帝となす

齊後魏

後魏は勢益〻盛にして孝文帝に至り大に漢種の文化を慕ひて都を洛陽に移し（四九三年）國姓を元と改め悉く鮮卑の風習を變じて大に文華を揚げたり然るに齊は弑虐相續ぎて明帝に至り屢〻後魏の孝文帝の侵攻を被り次で國内大に亂れ蕭衍は遂に和帝の位を簒ふに至れり（五〇二年）之を梁の武帝となす

後魏の分裂

後魏は南遷以後武事漸く弛みしが孝明帝の時胡太后政を攝して始て紀綱を紊せり爾朱榮は兵を擧げ胡太后を殺して孝莊帝を立てしが異圖を蓄へて誅殺せられ其族黨は却て亂をなしゝかば高歡は兵を擧げて之を平げ孝武帝を立てたり然るに程なく孝武帝は高歡と隙を生じ長安に走りて關西の大都督宇文泰に依り高歡は別に孝靜帝を鄴に立てたり（五三五年）是に於て後魏は東西の二國に分れぬ

梁兩魏の滅亡

梁は久しく無事なりしが東魏の降將侯景は兵を擧げて建康を陷れ武帝を制抑して簡文帝を立てたり東魏の高洋は之に乘じて梁の淮南を取り次で東魏を簒ひたり（五五〇年）之を

北齊の文宣帝となす時に梁は大に亂れて諸王相爭ひしが王僧辯、陳霸先の侯景を誅するに及び元帝は自ら江陵に立ちね然るに西魏は梁の漢東、益を取りまた江陵を陷れて元帝を降し蕭詧を立てゝ國を後梁と稱し西魏に臣事せしめしが陳霸先は程なく梁を簒ひたり五五七年之を陳の武帝となす時に宇文覺もまた西魏を簒ひたり之を周の孝愍帝となす是に於て江南は陳となり江北は北齊、周なりしが塞外は柔然亡びて突厥起れり

柔然突厥の興

第二十三課　陳、北齊、周、隋　柔然、突厥

柔然は匈奴の別種にして漠の南北に散在せしが社崙に至り後魏の道武帝に破られて一旦北退せり既にして社崙は內、外蒙古を併せて可汗と稱し屢〻後魏を侵しゝが大擅繼ぎ連に太武帝に破られて大に勢を失へり其後ち柔然は勢

を復し頭兵可汗出でゝ婚を兩魏と結び頗る驕傲なりしが突厥の部長伊利可汗は柔然を破りて頭兵可汗を殺し木杆可汗繼ぎて全く柔然を滅し五五五年蒙古、新疆の地を併せて周、北齊の境上を壓せり

周北齊の滅亡

周は突厥と結びて齊と爭ひしが宇文護が政を擅にせしかば武帝立ちて之を誅し自ら政を行ひて大に紀綱を整へたり北齊も既に突厥に通ぜしが內政整はず且陳の兵を受けて大に國土を失ひたり周の武帝は之に乘じて北齊を滅し五七七年遂に全く北方を併せしが會〻突厥と難を搆へたり宣帝繼ぎて突厥と和し陳を侵して益〻勢を振ひしが靜帝に至り外戚楊堅は其位を簒へり五八一年之を隋の文帝となす

隋の一統

隋の文帝は南北一統の志を抱きて突厥を破り黨項、吐谷渾を服し後梁の地を併せ陳の陳叔寶が奢侈に耽りて民心を

失ふに乘じ一擧して陳を滅し五八八年遂に全く海内を一統し

隋の盛時

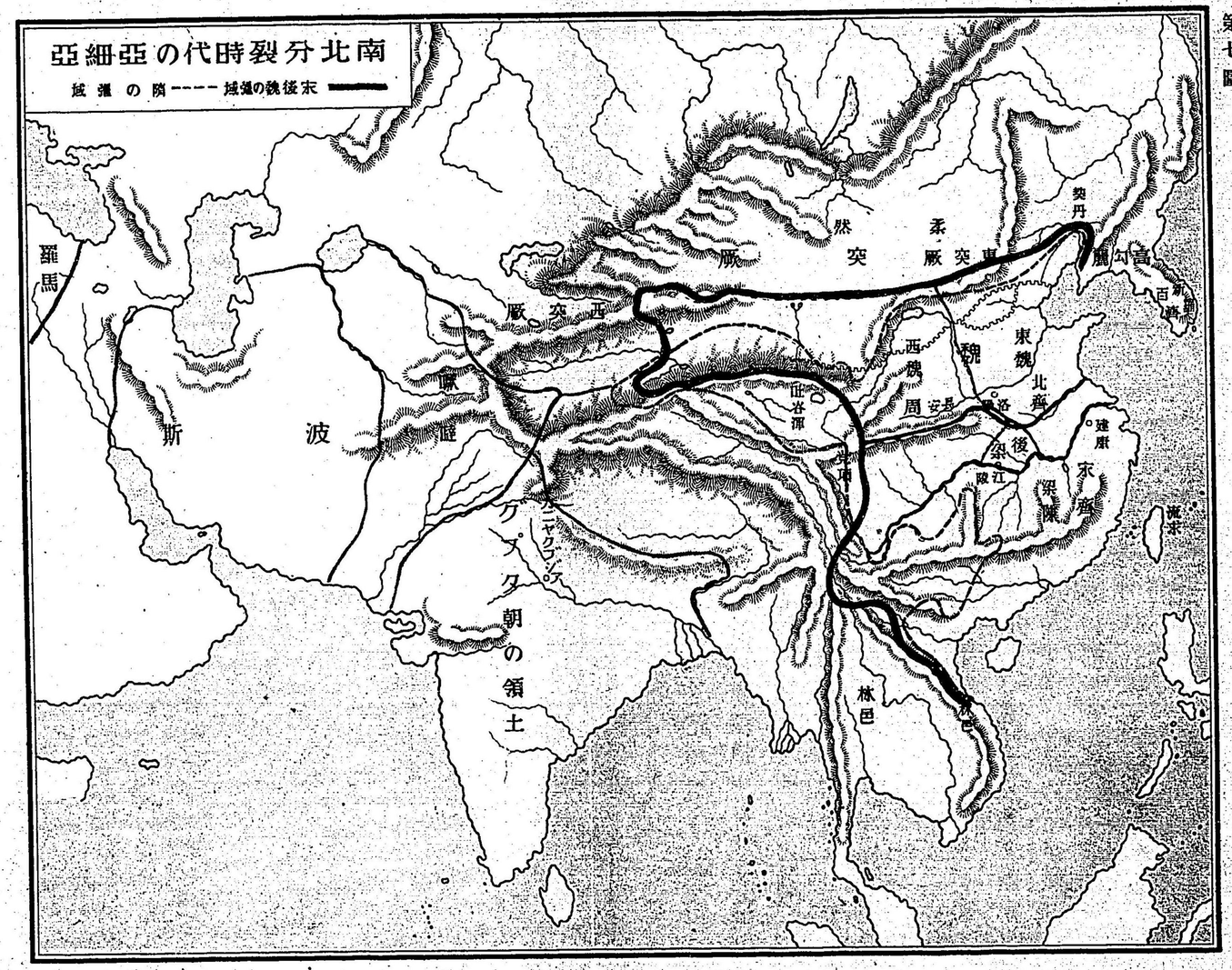
たり

文帝は是より外は突厥の一族を離間し日本、百濟に通じ又高句麗を伐ち内は節儉を尙び百姓を愛撫し又南北の學を併せ取れり然るに煬帝立ちて豪華を喜び各地に宮室、苑囿を造り南北に運河、馳道を通じて巡遊の用に供し又遠略を好み北は東突厥を服し西突厥を破り南は林邑を降し流求を征し西は吐谷渾を伐ち西域諸國を招き東は日本と交り百濟、新羅に通ぜしが高句麗を伐ちて大敗せり

隋の滅亡

煬帝の豪華と外征とは海内の疲弊を招き不逞の徒は之に乘じて各地に蜂起し李密、竇建德、薛舉、李軌、蕭銑、劉武周、王世充等最も雄傑なり時に李淵は其子李世民の勸に從ひ兵を晉陽に起して援を東突厥に借り直に長安に入りて恭帝を

第七圖



立て次で其位を簒へり六一八年之を唐の高祖となす

第二十四課　唐太宗の治　唐の制度

唐の一統

高祖は既に位に即きしが各地の豪傑尚ほ其威命に從はざりしかば李世民と謀り頻に兵を用ひて西は薛仁杲を降し李軌を執へ北は劉武周を滅し南は蕭銑を平げ東は竇建德を執へ王世充を降せり其他の豪傑も互に攻爭して全く滅亡せしかば海内は遂に唐の治に歸しぬ六二八年

太宗の治

李世民は創業を輔けし功高きを以て高祖の讓を受けたり、六二七年之を太宗となす太宗は房玄齡、杜如晦等を宰相とし魏徵、玉珪等を諫臣とし又李勣、李靖等を將軍とし内は國政を整理し外は國威を宣揚せり太宗死して高宗繼ぎ長孫無忌褚遂良、李勣等遺詔に依りて文武の諸政を輔けしかば海内は愈〻治まりて唐室は益〻熾となりぬ

唐の制度

唐の制度は支那歴代の典範にしてまた日本、朝鮮歴代の摸範たり官制は中央に三師（太師、傅、太保）三公（大尉、司徒、司空）ありて天子の師範となり六省（尚書、中書、門下、殿中、秘書、内侍）ありて中書（詔勅を宣奉す）門下（詔勅を審査す）尚書（詔勅を施行す）の三省は大政を統べ尚書省の下に六部（吏、戸、禮、兵、刑、工）ありて政務を分擔す地方は海内を十道（關内、河東、河南、河北、山南、隴右、淮南、江南、劍南、嶺南）に分ち各道に巡察ありて府、州、縣を督察し府に牧尹、州に刺史、縣に令ありて各〻民治を掌る田制は均田の法を行ひ租稅は租、庸、調の三種に分ち兵制は各道に數多の折衝府を置きて地方を鎭し又年毎に交番して京師の宿衛に當つ法制は律十二篇を設け笞、杖、徒、流、死の刑を定め之に贖罪、十惡、八議を附せり學制は京師に國學、大學、四門學、律學、書學、算學、弘文館、崇文館等を設け又地方に府學、州學、縣學を設けて經書を敎課目となし又秀才、進士、明經、明法等の考試課目を設けて士の登庸をなせり

第二十五課　唐の外征　武韋の禍

唐の外征

唐は東突厥の輕侮を受けて屢〻邊を侵されしが太宗は薛延陀と結び又李勣、李靖を遣し東突厥を伐たしめて遂に之を降せり是に於て唐の盛名大に振ひ塞外の諸國爭ひて入貢せしが太宗はまた兵を用ひて吐谷渾、吐蕃、高昌を定め中印度のシラヂヤ（戒日王）と交を結び高句麗を伐ち薛延陀を降し又威を五印度に振ひたり高宗繼ぎて益〻兵を用ひ西突厥を伐ちて沙鉢羅可汗を擒にし波斯のフェロズを援けて大食（アラビヤ）を拒ぎ又新羅を援けて百濟、高句麗を滅せり

唐の版圖

是に於て唐の版圖は頗る擴張し其威令の及ぶ所東は日本海に達し西は中亞細亞を包み南は後印度に至り北はシベリヤに及べり唐は羈縻州に六都護を置き安東都護は滿州、

朝鮮を統轄し安北都護は外蒙古を統轄し單于都護は內蒙古を統轄し北庭都護は天山北路を統轄し安西都護は天山南路、中亞細亞を統轄し安南都護は南方諸國を統轄せり

武氏の禍

唐は國威を外に耀しゝかど女禍を內に生ぜり初め高宗は太宗の宮女武氏を後宮に入れて之を寵せしが遂に立てゝ皇后となせり既にして武后は政に預りて漸く權を振ひ高宗の死後恣に中宗、睿宗を廢立し又唐の宗室、貴戚を夷滅し遂に則天皇帝と稱して國號を周と改めたり（六九〇年）されど武后は權略に富み能く人材を用ひしかば將相皆な其人を得て海內また靜穩なり

韋氏の禍

既にして中宗は武后の病むに乘じて位に復し（七〇五年）天下は再び唐の世となりしが韋后また政に預りて權を恣にし遂に中宗を弒して自ら政を執れり是に於て睿宗の子李隆基は兵を起して韋后及び其黨を誅し睿宗を迎へて位に復し次で其讓を受けたり

第二十六課　玄宗の治　安史の亂

玄宗の治

玄宗は紀綱廢弛の後を承け姚崇、宋璟等を用ひ頗る意を政治に注ぎて海內を靜平にし又邊陲の要地に十節度使（安西、北庭、河西、朔方、河東、范陽、平盧、隴右、劍南、嶺南、）を置きて四方を鎭撫せり

安祿山の亂

既にして玄宗は漸く奢侈の心を生じ政事を姦臣李林甫に委して遂に安祿山の亂を招げり安祿山は胡人なりしが楊貴妃の意を得て玄宗の信任を受け平盧、范陽、河東の三節度使を兼ねて勢威北方を壓し漸く唐を輕視して陰に異圖を抱きしが遂に兵を范陽に擧げて叛し（七五五年）南下して直に洛陽を陷れ自ら燕帝と稱せり顏眞卿、顏杲（カウ）卿は各〻義兵を擧げて之を防ぎ郭子儀、李光弼はまた之を破りて河北の諸地

を復せしが安祿山は益〻勢を振ひ西進して遂に長安に迫れり玄宗は蜀に出奔し肅宗は靈武（甘肅省靈州府）に即位し援兵を回紇に借りて漸く勢を復し遂に長安洛陽を恢復せり

史思明の亂

時に安慶緒は既に其父安祿山を弑して自立せしが戰敗れて鄴に走りぬ其將史思明は之を救ひて郭子儀等を却け次で安慶緒を殺し范陽に據りて帝と稱しまた洛陽を取りて一時勢を復せしが李光弼に破られ次で其子史朝義に殺されたり時に代宗立ちてまた兵を回紇に借り諸道の兵と共に大に賊を破りしかば賊將は史朝義を斬りて降り（七六三年）安史の亂始て平定しぬ

外寇

時に唐の邊備は全く廢れしかば塞外の諸國は之に乘じて頻に內地に入寇せり吐蕃は河西、隴右を取り進みて長安を犯し代宗を陝州に走らせしが郭子儀の兵來ると聞きて遁

れ去り次で回紇と共にまた入寇せしが郭子儀が回紇と結ぶと聞きてまた遁れ去り南詔もまた吐蕃と通じて屢〻劍南の地を侵せり

第二十七課　藩鎭、宦官の禍　唐末の大亂

藩鎭の跋扈

唐は高宗の時幽州に節度大使を置き玄宗の時邊陲に十節度使を置きしが安史の亂後は內地にも節度使を配置して之に兵、政の二權を授けぬ是より藩鎭は漸く強く遂に子孫世襲し軍士橫奪するの弊を生じ殊に河北三鎭（成德、魏博、盧龍）は頗る唐室の禍をなせり德宗立ち兩稅の法を行ひて稍〻財政を整へ之に乘じて藩鎭を制せむとせしが事ならず憲宗に至り杜黃裳、裴度等を用ひて大に紀綱を張りやゝ藩鎭を制するを得たり（八一九年）

宦官の專横

宦官は玄宗の時より漸く勢を作し德宗の時に至りて軍國の事に參し益〻勢を振ひて遂に歷代天子の廢立を恣にするに至れり文宗は之を憤慨して其誅鋤を李訓鄭注と謀りしが事ならず會〻朝廷に朋黨の爭起り李宗閔、牛僧孺は私怨を以て李德容と相排し時に宦官の助を借りしかば宦官は之に乘じて益〻勢威を振へり宣宗立ちて黨爭を一掃せしかども藩鎮の跋扈と宦官の專横とは如何ともする能はざりき

黄巢の亂

宣宗死して懿宗、僖宗相繼ぎ皆な奢侈を好みて賦斂を急にせしかば百姓流殍して盜賊所在に起れり（八七五年）王芝仙は亂を山東に起し河南淮南の地を攻剽して敗死せしが其將黄巢は益〻勢を振ひて洛陽を陷れ次で長安を取りて齊帝と稱せり沙陀（西突厥の別種）の部長李克用は僖宗の命を奉じて黄巢の亂を平げしが會〻賊の降將朱全忠と隙を生じ晉陽に據りて之を伐たむとし朱全忠も汴（河南省開封府）に據りて李克用に備へぬ是より天下大に亂れたり

唐の滅亡

僖宗死して昭宗立ち宦官は内に跋扈し藩鎮は外に攻爭し殊に近畿の諸鎮は屢〻長安を犯せり李克用は近畿の難を救ひしが朱全忠は宦官を殲して陰に異圖を抱き昭宗を促して都を洛陽に遷しゝが程なく帝を弑して哀帝を立て次で其位を簒ひて汴に都せり（九〇七年）之を後梁の太祖となす

第二十八課　東方諸國の盛衰

新羅の强勢

宋、後魏の初め高句麗、百濟、新羅の三國は朝鮮半島に鼎立し新羅は百濟と結びて高句麗に當りしが法興王、眞興王相繼ぎ高句麗と結びて百濟を侵し又任那を滅し（五六二年）益〻國力を張れり然るに百濟は日本の保護と高句麗の後援とを得

て新羅に迫りしかば新羅は眞平王以來援を隋、唐に請ふに至りぬ

百濟高句麗の滅亡

高句麗は嬰陽王に至り遼西を侵して隋の文帝、煬帝と戰ひしが其相泉蓋蘇文は威福を張りて寶藏王を立て新羅が入唐するの途を絶ちて唐の太宗と遼東に戰へり又百濟も武王、義慈王相繼ぎて連に新羅を侵しゝが唐の高宗及び新羅の武烈王に攻められて遂に降り王弟扶餘豐は日本、高句麗の援を得て興復を圖りしかど事遂に成らざりき六六三年高句麗の寶藏王も次で唐の高宗及び新羅の文武王に攻められて唐に降れり六六八年

新羅の隆盛

唐は百濟、高句麗の地を悉く收めしが新羅は唐を助けて更に益する所なし文武王は心頗る不平にして窃に高句麗の餘衆を誘ひ又百濟の故地を略し唐の詰責を蒙りて其罪を謝せしが遂に朝鮮半島をほゞ一統せり

渤海の興亡

時に高句麗の故地に渤海起れり渤海は粟末靺鞨にして通古斯種に屬しもと松花江の邊に居りしが部長大祚榮に至り高句麗の故地を略して唐の玄宗より渤海郡王の封爵を受けたり七一三年其後ち大武藝、大仁秀の明君出でゝ益〻地を拓き東は日本海を究め西は遼河を踰え南は新羅に接し北は松花江までの地を有して海東の盛國となりしが後ち契丹の太祖に滅されたり

新羅の衰亡

新羅は文武王以後國内太平なりしが眞聖女王に至り佞幸權を弄して國政大に亂れ甄萱は完山（全羅道全州府）に據りて後百濟王と稱し弓裔は鐵門（江原道鐵原府）に據りて泰封王と稱せしが泰封の將王建は別に松嶽（京畿道開城府）に據りて高麗王と稱し泰封、新羅、後百濟を次第に滅して遂に朝鮮全土を一統せり六九六

三年之を高麗の太祖となす

第二十九課　西北諸國（突厥、回紇、吐蕃等）の盛衰

突厥の興起

突厥は土耳其種に屬し金山（阿爾泰山）の南に居りて世〻柔然に屬せしが伊利可汗に至り始て其羈絆を脱し木杆可汗繼ぎて遂に之を滅し更に嚈噠、契丹、結骨を破りて内、外蒙古、新疆の地を併せ都斤山（外蒙古杭愛山附近）に居りて周、北齊を壓せしが沙鉢略可汗に至り屢〻隋の文帝と争ひ且其反間を信じて同族阿波可汗を襲へり時に達頭可汗は千泉（タラス河附近）に居りて突厥の西部を統べしが阿波可汗を援けて沙鉢略可汗と争へり突厥は是より東、西二部に分れたり

東突厥

東突厥は沙鉢略可汗の後都藍、啓民の二可汗相繼ぎて隋に事へしが始畢可汗に至り隋末の群雄を臣服して頗る強し既にして頡利可汗立ち屢〻唐を侵しゝが其姪突利可汗及び薛延陀、回紇の背くに及び唐の太宗に伐たれて亡び（六三〇年）薛延陀は突厥の北部を併せしがまた唐の太宗に滅されたり（六四六年）其後東突厥の餘類は時〻起りて唐の邊を擾しゝが遂に回紇に滅されたり

西突厥

西突厥の達頭可汗は東羅馬と通じて波斯に迫り又阿波可汗を援けて東突厥と戰ひしが唐の初め射匱可汗出でゝ金山、西海（アラル海）間の地を統べ統葉護可汗繼ぎ鐵勒を從へ又波斯を侵して勢を西方に振へりされど程なく國内は大に亂れ屢〻東、西の二部に分れしが沙鉢羅可汗出でゝまた西突厥の地を一統し更に唐の西邊を侵して高宗に滅されぬ（六五七年）

回紇

回紇は薛延陀と共に鐵勒の一部にして土耳其種に屬し獨樂水（外蒙古土拉河）の上に居りしが東突厥、薛延陀の故地を併せて唐に事へ部長斐羅は唐の玄宗より懷仁可汗の封爵を受け

ぬ（七四四年）既にして回紇は唐を援け安史の亂を平げ厚く其恩禮を受けしが漸く驕りて屢〻唐の邊境を刼略し天親可汗に至りて唐の德宗と和せしが唐末に至り黠戛斯に破られて部衆遂に耗散せり

吐蕃

吐蕃は西羌の後なり棄宗弄贊に至り吐谷渾、黨項を破り又唐の太宗と兵を交へしが其後ち大に勢を振ひて西藏、青海、天山南路、アッサム、チーバルの地を併せ又唐の河西、隴右の地を取れり（七六三年）是より吐蕃は回紇を誘ひ又南詔と結び屢〻唐を侵しゝが後ち南詔に破られて大に勢を失へり

南詔

南詔は吐蕃の東西に國し皮羅閤に至り雲南貴州の地を併せて唐の玄宗より雲南王の封爵を受け安史の亂後吐蕃と結びて屢〻唐を侵しゝが後ち唐の德宗と和して吐蕃を破り唐の末に至り酋龍は自ら大理皇帝と稱して屢〻唐、交趾を侵せり

第三十課　波斯、大食の廢興

印度

印度は梁の時に當りウヂャーナ（北印度）にヴィクラマーヂチャ（超日王）出でゝ嚈噠を攘ひ西、北、中三印度に君臨して大に文學、佛教を興せり其後ちシラーヂチャ（戒日王）出で（六一〇年）カニヤクブジに都して威を全印度に振ひ又好を唐の太宗と結びしが程なく其臣阿羅那順に弑せられたり會〻唐の使王玄策來りしが之を聞き吐蕃、チーバルの兵を發して阿羅那順を執へ唐の威名を五印度に振へり（六四八年）是より印度は分裂してまた統一せず

波斯

ブラーマン教徒は新にヒンド教を興して頻に佛教徒と爭ひしが大食の侵寇するに及びモハメット教は盛に印度に入れり

波斯は梁の時に當りクスル一世出で東は突厥に通じて嚈

嗹を破り西は東羅馬を侵して歳幣を取り頗る勢を振ひしが後ち東羅馬が西突厥と結ぶに及び五六九年また之と兵を交へたり既にしてクスル二世出で好を隋に通ぜしが東羅馬と戰ひて頗る國力を失ひエズデジルド三世に至り大食の侵寇を蒙りて救援を唐の太宗に求めしかど得ずして遂に亡びたり六四一年

大食

大食は唐初に當りモハメット出でゝ猶太、基督の二教を折衷し新に宗教を開きて大食を教化し遂に兵力を以て布教の方便となせり其死後六三二年ハリフ繼嗣者は皆な兵力を以て布教を謀り十有餘年にして西は東羅馬に迫りシリア、埃及を略し東は波斯を滅し好を唐に通ぜりハリフ、ワリッドの時更に兵を出して西は亞非利加、西班牙を略し東は中亞細亞、天山南路、西印度を併せ七一一年益々モハメット教を弘布せり既に

して大食に内訌を生じ西班牙は爲に分離せしがハリフは尚ほ亞細亞、亞非利加の地を奄有してバグダットに都しハルンの時に至り七六八年其國運は隆盛の極に達せり

第三十一課　漢、唐の學藝

漢の儒學

秦の始皇以來儒學は頗る衰へしが漢の武帝が大に之を興すに及び名儒輩出して漢には賈誼、董仲舒、楊雄の徒あり後漢には賈逵、馬融、鄭玄の輩あり就中鄭玄は兩漢の儒學を大成せりされど皆な諸經の註釋を主として敢て新説を唱ふるものなかりき

六朝の儒學

三國の世に至り魏に王肅、王弼、何晏の徒出でしが經書註釋の倦怠と氣節稱揚の反動とに由り老佛の學大に行はれて遂に清談を開き晉以來盛に江南に行はれぬ儒學も南、北二派に分れて華美なる王肅の學は江南に行はれ質實なる鄭

玄の學は江北に行はれしが隋に至り南北の學を併せて儒學復興の端を發せり

唐の儒學

唐に至り儒學は大に振興して兩漢を凌ぐに至りしが太宗が五經（易、書、詩、禮、傳）正義を作り經說の標準を定めてより遂に註疏の學となり敢て異說を唱ふるもの殆どなく殊に安史の亂後は儒學の勢やゝ衰へて獨り韓愈を出しゝのみ

唐以前の文藝

秦漢以來文藝は漸く發達せしが漢の武帝が之を勸むるに及び盛に興りて賈誼、司馬遷、司馬相如、劉向、楊雄の徒前後輩出せりされど後漢以後文藝は漸く浮華に流れて唯後漢に班固、蜀に諸葛亮の出でしのみ晉以後は益々浮華に陷りて駢儷對偶を競ひしが晉に陳壽、晉宋の際に陶潛（淵明）等出で梁に沈約、徐陵、庾信等出でたり

唐の文藝

唐に至り文藝は大に興りて詩は其極に達せり唐初文藝は

佛教

尙ほ浮華の風を脫せざりしが玄宗に至り張說、蘇頲出でゝ頗る文氣を變じ李白、杜甫出でゝ大に詩風を改めたり憲宗に至り韓愈、柳宗元出でゝ古文を唱道し次で元稹、白居易出でゝ詩風を一新せり後世詩は李白、杜甫、白居易、韓愈を稱し文は韓愈、柳宗元を稱せり

第三十二課　漢、唐の宗教　南海の貿易

漢以來佛教は漸く流行し晉以來帝室の歸依と保護とに依りて益々流行し後趙の石勒は佛圖澄（フドチョウ）、前秦の符堅は衞道安（エドウ）の後秦の姚興は鳩摩羅什（クマラジュウ）を尊信して皆な佛教の弘布を圖れり法顯（ホッケン）が遠く印度に遊びしより東西僧徒の往來頗る繁く佛教は一段の勢力を得て宋、後魏以來益々流布し印度の僧菩提達磨（ボダイダルマ）は梁に入りて禪學を說けり唐に至り佛教は隆盛の極に達し玄奘（ゲンジョウ）、義淨（ギジョウ）は印度に遊び又善無畏、金剛智、不空は

印度より來り佛教も數派（律、三論、淨土、禪、天台、華嚴、法相、眞言等）をなして盛に流行し遂に東洋諸國に波及せり

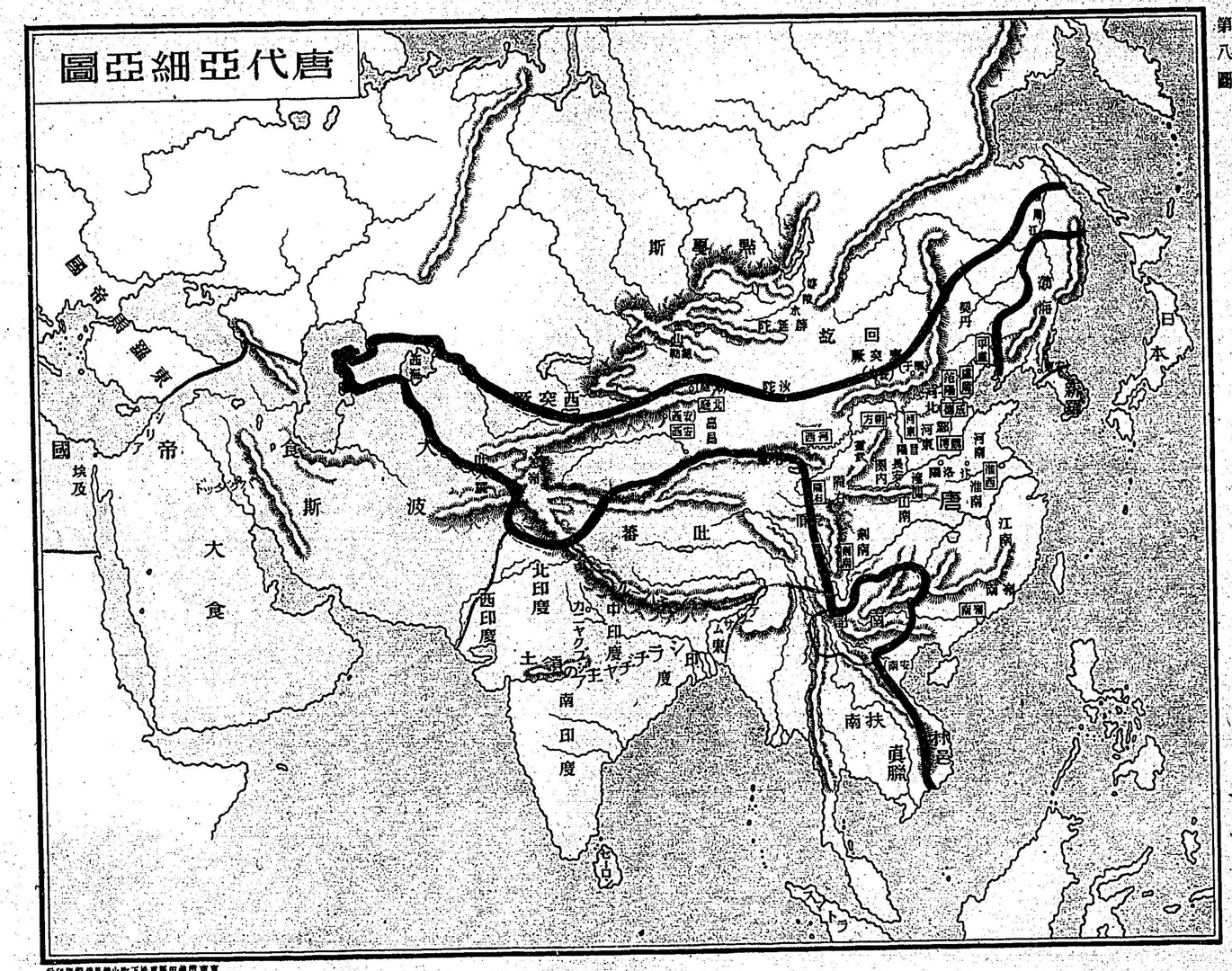
道教

道教は秦漢の際方士が老莊の說に附會して作りしものなり當初はたゞ俗間に行はれしが晉以來漸く士大夫の信仰を受けて遂に勢を作せり唐に至りて帝室の尊崇を蒙り玄宗の時遂に唐室の正教となりて大に佛教と相鬪きしが武宗に至り悉く他教を斥けて尊ら道教を保護せしかば唐一代の間は盛に行はれたり

外教の傳來

唐の世東西の交通開くるに及び西亞細亞の諸宗教は漸く東流して遂に唐に入れり波斯の祆教（ゾロアスター教又拜火教）は宋後魏の頃より葱嶺以東に行はれしが唐初に至りて內地に入り又マニ教（拜火、佛、基督教の折衷）は唐初專ら回紇に行はれしが安史の亂後また內地に入れり景教（ネストル派基督教）は波斯より傳來

第八圖


唐代亞細亞圖
日本
新羅
渤海
契丹
唐
回紇
吐蕃
突厥
西突厥
大食
波斯
帝國
東羅馬國
埃及
北印度
西印度
中印度
南印度
ヤチ
ムル
ジラ
印度
土領の王
扶南
眞臘
林邑
ルソン
スマトラ
ジャワ
ボルネオ
セレベス
ニューギニア
ビルマ
ペルシア
ドッケスタン
ヒンドスタン
ヒマラヤ山脈
ヒンドクシ山脈
ヒンドクシ山脈
ヒンドクシ

南海の貿易

して唐の太宗、高宗、玄宗の尊信を受け回教（モハメッド教）は唐の德宗以來江南に流行せり

後漢の末より羅馬の商船は印度を經て支那に來り支那の商船も時に印度に航し日南を中心として盛に貿易を營みしが晉の紛亂するに及び其貿易も遂に衰微せり然るに佛教東漸して支那、印度の交通開くるに及び支那の商船は南洋諸島を經て錫崙に航し唐初には更に進みて波斯灣、アテン港に至り錫崙を中心として盛に貿易を營みしが太食が印度河以東の海港を得るに及び其商船は續々南洋諸島を經て支那に航し廣東、福建、浙江の諸港に於て大に貿易を營みたり

第三十三課　五代契丹の關係

後梁後唐

後梁の太祖が唐を簒ひて中原に據るに當り晉、燕は北に岐

蜀は西に吳、吳越、閩、楚、南漢は南に各〻割據して皆な獨立の姿をなせり晉の李克用は最も强く後梁は頻に河東を爭ひしが李存勗(キヨクヨウ)繼ぎ燕、後梁を滅して位に洛陽に卽けり(九二三年)之を後唐の莊宗となす是より莊宗は岐、蜀を併せしが漸く驕奢に耽りて鄴都の變を招き明宗は簒立し又荆南、後蜀は新興せり李從珂に至り其將石敬塘は援を契丹に借りて後唐を滅し位に卽きて汴に都せり(九三六)之を後晉の高祖となす」

後晉契丹

契丹は東胡の後にして內蒙古の東部に居り屢〻唐に叛服せしが後梁の初め耶律阿保機(ヤリツアボキ)出でゝ帝を臨潢(西刺木倫河の北)に稱せり(九一六年)之を契丹の太祖となす太祖は是より北は室韋、女眞を破り西は回紇、黨項を降し東は渤海を滅して遂に內蒙古、滿州の地を併せ又太宗繼ぎ後晉を興して幽、薊等十七州と歲幣とを取りしが後ち後晉の出帝が臣禮を缺きたるを怒りて之を攻滅し(九四七年)自ら汴に據りて國を遼と號せり然るに程なく太宗は北歸せむとして途に死し後晉の將劉知遠は帝を稱して開封(汴)に都せり之を後晉の高祖となす」

後漢

時に南唐は吳に代り且閩を滅しゝが會〻後漢に內亂起りたるに乘じ後蜀と結び又遼に通じて後漢の挾攻を謀れり後漢は隱帝立ちて內亂を鎭定せしが其將郭威を忌み之を除かむとして弑害に逢ひ郭威は遼の世宗を拒がむとして北向せしが途に將士に推されて位に卽き開封に都せり(九五一年)之を後周の太祖となす

後周の經營

時に北漢は河東に起り南唐は楚を滅し南漢は嶺南、交趾を併せしが後周は世宗立ちて頗る强く北は北漢の河北を取り西は後蜀の北邊を略し南は南唐の江北を奪ひ更に遼を伐ちて瓦橋關(直隸省保定府)以南の地を復せり世宗死して恭帝繼

ぎしが其將趙匡胤は大に將士の心を收めしかば遂に推されて位に卽き開封に都せり九六〇年之を宋の太祖となす

第三十四課　宋、遼、西夏の關係

宋の一統

宋の太祖は趙普と謀り務て文臣を節度使に任じ其州郡を朝廷の直轄となして民治を通判に財賦を運轉使に委し又驍勇を撰みて禁旅に補し禁旅を出して邊戍に當て漸く藩鎭の跋扈と將士の暴橫とを除けり是より太祖は兵を出して荆南、後蜀、南漢、南唐、吳越を逐次に定め太宗繼ぎ北漢を滅して遂に海內を一統せり九七九年

宋交趾の關係

宋は海內を一統するに及びて交趾、遼との關係を起せり交趾はもと南漢に屬せしが丁部領起りて瞿越を建て宋の太祖より交趾郡王の封爵を受けたり然るに程なく國亂れて宋の太宗に伐たれしが黎桓は自立しまた宋の封爵を受けて外藩となれり九九三年

宋遼の關係

遼は太宗の後ち國勢久しく振はざりしが宋の太宗が其南邊を侵すに及び景宗は逆擊して之を高梁河北京の西に破れり九七九年是より遼、宋は頻に河北に相爭ひしが遼は聖宗立ちて國をまた契丹と號し宋の眞宗が新に立つに乘じて南侵せり眞宗因て寇準の議を納れ自ら澶州直隸省大名府に進みしが歲幣を契丹に贈りて和を結べり一〇〇四年是より契丹の聖宗は高麗を降し河西の回紇を征し又渤海の遺族を滅して益〻勢を振ひしが宋は仁宗立ちて更に西夏の大敵を生ぜり

宋西夏の關係

西夏は黨項の後にして圖伯特種に屬し世〻夏州鄂爾多斯南部に居りしが李繼遷に至り遼の聖宗に降りて夏王となり屢〻宋を侵せり李德明繼ぎて宋、遼に臣事せしが李元昊に至り河西の回紇を伐ちて帝を興慶甘肅省寧夏府に稱し一〇三八年頻に宋

を侵せり仁宗因て韓琦、范仲淹を遣し頻に之を防ぎしが會會契丹の興宗に迫られ先つ之に歲幣を增して和を結び次で西夏に封冊を授け且歲幣を賜ひて和を約せり（一〇四三年）

仁宗の治

宋はかく外侮を受けしが仁宗の世には韓琦、范仲淹、富弼、歐陽修等の君子多く又呂夷簡、夏竦等の小人もあり夏竦等は韓琦、范仲淹等を目して黨人となし兩黨更々相となりしが仁宗賢明にして能く正邪を斷ぜしかば君子概ね朝に立ちて國政能く整へり

第三十五課　新舊兩法黨の軋轢

神宗の廢法

仁宗より二傳して神宗に至り富强を致さむと欲して王安石を用ひたり（一〇六九年）王安石は富國を計らむがために青苗、市易、募役等の新法を行ひ又强兵を計らむがために保甲、保馬等の新法を行ひしが韓琦、司馬光、蘇軾等は極て之を非難せり然るに王安石は悉く反對者を斥け韓絳、呂惠卿等を引きて一意に新法の實施に務めたり

宋大越の關係

神宗は新法を行ふと共に大越、西夏、遼との交渉を起せり交趾は黎氏の將李公蘊簒立して國號を大越と改め（一〇一〇年）李日尊に至り宋を侵し又占城を伐ちしが李乾德繼ぎ宋の南境に侵入して新法の非を唱へぬ神宗因て占城、眞臘を誘ひ共に大越を伐ちしが却て大に軍を失へり

宋西夏の關係

西夏は李元昊死し李秉常繼ぎて屢々宋を侵せり神宗因て王韶の議を納れ河湟の地を復して西夏を制せむとせしが吐蕃諸部の叛服常なきを以て容易に其志を達せず後ち西夏の內亂に乘じて之を伐ちしが却て大敗せり

宋遼の關係

契丹は興宗死して道宗立ち國號をまた遼と改めしが宋に西夏の難あるに乘じ新に境界の改定を迫りて北邊の地を

奪へり

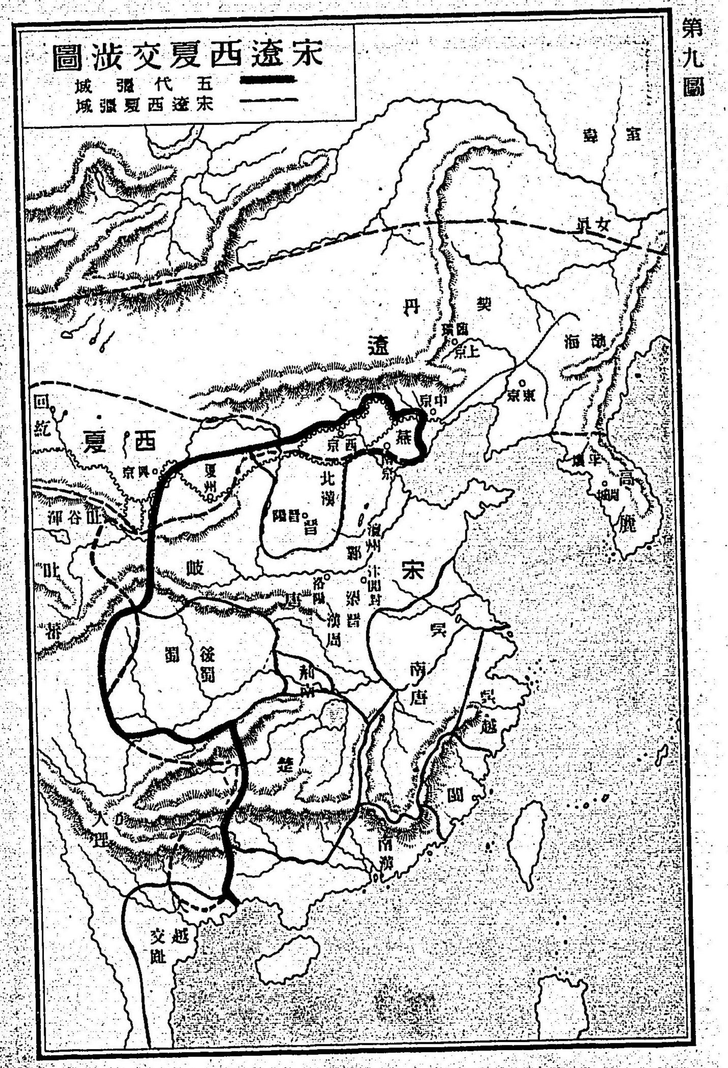
哲宗の政復

神宗は外は拓邊に破れ内は黨爭を釀して死し哲宗繼ぎて太皇太后高氏政を攝し（一〇八六年）王安石の黨を斥けて司馬光等を用ひ悉く舊法を復せしが程なく司馬光死して舊法黨は首領を失ひ數派に分れて相爭ひしかば新法黨は之に乘じてやゝ勢を復し哲宗政を親らするに及び（一〇九三年）章惇等は遂に朝に入りて舊法黨を斥け漸く新法を復せり

徽宗の紹述

徽宗立ちて向太后政を攝し（一一〇一年）韓忠彦等の舊法黨を用ひて新法黨を斥けしが徽宗政を親らするに及び蔡京等の新法黨を用ひてまた舊法黨を斥けぬ時に徽宗は道教を信じ土木を興し又逸樂を好み絶えて政を顧みざりしかば蔡京は威權を擅にして内は法度を改め族黨を用ひ外は童貫を用ひ吐蕃を伐ちて河湟の地を復せり

第九圖



第三十六章　遼金の廢興

遼の衰運

遼は道宗尙ほ位に在りて文學を好み又佛敎を崇ひ漸く士風を柔弱にし且耶律乙辛を寵して賢臣を斥け漸く羈屬諸部の心を失へり然るに天祚帝繼きて心を政治に留めさりしかは國運は益〻衰頽して遂に女眞の迫る所となれり

金の興起

女眞は黑水靺鞨の後にして通古斯種に屬し熟女眞と生女眞との二大部に分る熟女眞は混同江（松花江）の西南に居りて遼の版籍に入り生女眞は其東北に居りて遼に羈屬せり生女眞に完顏部ありしか部長烏古廼に至りて漸く强く五傳して阿骨打に至り遼の天祚帝に背きて混同江附近の諸部を服し遂に國を金と號して帝と稱せり（一一一五年）之を金の太祖となす太祖は是より熟女眞を降し又遼を侵し遂に東京遼陽を陷れて更に上京臨潢に迫れり

宋金の同盟

宋は童貫か既に吐蕃に克ちしを以て更に遼を圖らむと欲し使を金に遣して遼の狹擊を議し宋は南京（北京）を攻め金は中京（大定）を攻め事若し成らは宋は後晉の割きし地を復し金は自余の地を收め且宋か遼に贈りし歲幣を受けむことを約せり是に於て金の太祖は遼を伐ちて上京、中京を陷れ又西京（大同）を取りしか宋の童貫等か南京を取る能はさるを見て直に兵を進めて之を陷れ前約を棄て、既定の歲幣の外毎歲錢百万緡を收むることを約し南京及其附近の六州を宋に與へたり（一一一二年）

遼の滅亡

時に遼の天祚帝は金兵に迫はれ西走して西夏の李乾順に依らむとせしかは金は遼西夏の合せむことを恐れ西夏に地を割くを許して天祚帝を執送せむことを求めぬ會〻金は太祖死して太宗立ちしか西夏は藩を金に稱して下塞以北陰山以南の地を得たりしかは天祚帝は黨項に走らむとして途に金兵に執へられたり（一一一二年）是に於て遼は一旦亡ひしか其族耶律大石は西走して更に中亞細亞に西遼を建てたり

第三十七課　宋金の交渉

金の南侵

金の太宗は南下の機を窺ひしか宋か金の亡命を納れ且所約を履まさるを名として遂に南侵せり宋の徽宗は自ら責を引きて位を欽宗に傳へ和を金に請ひしか開封は殆と危急に迫れり時に宋には和戰の二論起りしか欽宗はまた和を金に求めて犒師料を出し三鎭（中山、河間、太原）を割き又親王を質とせり然るに金はまた南侵して遂に開封を陷れ徽宗、欽宗を執へ又張邦昌を楚帝となせり（一一二七年）

宋の南渡

是に於て宋の高宗は位に應天（河南省歸德府）に即き李綱等を用ひ

て稍〻勢を復せしか程なく金を避けて南幸せり金は之に乘して南侵し開封、楊州、抗州等を下し且劉豫を齊帝となし頻に張浚、韓世忠、岳飛等と戰ひしか後ち金兵は北歸して高宗は都を臨安抗州に定めたり一一三四年之を南宋と云ふ

秦檜の和議

時に金は太宗死して淵宗立ち宋の諸將は之に乘して頻に金、齊の兵を破りしか高宗は秦檜を用ひて屢〻和を金に求めぬ金は齊を廢して一旦之を許さしか程なく南侵して宋の諸將に破られたり然るに秦檜は諸將を召還し且岳飛等を殺してまた和を約し宋は歲貢を納め金は徽宗の梓宮を還せり一一四一年

南北の小康

既にして金の廸古乃は淵宗を弑して自立し都を中都北京に遷して南侵せしか戰敗れて其下に弑され世宗立ちてまた和を宋に通せり宋も孝宗立ちて回復を圖りしか其利なき

を覺りて遂に金と和せり一一六五年是より宋、金相和して休息すること殆と四十年に亘れり

宋金の衰運

金は世宗死して章宗繼き嬖臣胥持國、事を用ひて漸く國政を紊し宋は孝宗より二傳して憲宗に至り韓侂胄威權を恣にして朱熹等を貶斥し金の國難に乘して北伐せしか諸軍皆な潰えしかは宋は韓侂胄の首を送り且歲幣を增して和を金に請へり一二〇八年時に蒙古の勢正に熾にして東洋の大勢茲に一變せむとす

第三十八課　宋代の儒學文藝

儒學

儒學は漢唐を通して概ね注疏の學なりしか注疏の反動と佛敎の刺激とに由りて漸く學風を變し宋に至りて遂に哲理の學となれり仁宗の時周惇頤出て、其氣運を啓き神宗の時程顥、程頤出て、其後を繼き又邵雍、張載出て、二程と

名を競ひ遂に宋學の一派を開きて當時の學者を誘導せり宋室南渡の後朱熹出て、二程の學を祖述し宋學を大成して永く範を後世に垂れしか同時に陸九淵出て、朱熹と對峙せり又金は久しく中原に據りしか儒家には僅に趙秉文を出ぎしのみ

文藝

文藝は唐末より漸く衰へ宋初に至りて萎靡たりしか仁宗の時歐陽修出て、文弊を正し詩風を矯むるに及ひ翕然として興り文には蘇洵、蘇軾、蘇轍、王安石、曾鞏の徒出て詩には蘇轍、梅堯臣、黄庭堅の輩出てしか詩は唐に比して稍〻遜色あり宋室南渡の後文藝は理學の流行に壓されて稍〻勢を失ひしか尚ほ文には王十朋、葉適の徒出て詩には范成大、陸游の輩出てたり又金の文藝は遙に遜に優り文士また乏しからすして元好問の徒出てたり

宗教

佛教は五代の末に至りて一旦衰へしか宋の太祖の保護を得て大に勢を復し諸宗派並ひ行はれしか禪宗最も盛にして懷璉、慧龍等の諸名僧を出し其影響を儒學に及ほせり又道教も大に行はれしか徽宗の奬勵を蒙るに及ひ遂に佛教を凌くに至れりされと宋室南渡の後道佛二教は共に稍〻勢を失へり

第三十九課　宋代の高麗

高麗の初世

五代の世に當り高麗の太祖は朝鮮半島を一統して好を後晋に通せしか光宗に至り貢を宋に修めて太祖より封冊を受けぬ當初高麗の君主は概ね失德ありて僅に太祖の遺業を保守せしか成宗に至り宋に倣ひて制度を定め文學を勸め又深く佛教を崇みて遂に太祖の遺業を完成せり

高麗遼の關係

時に高麗は契丹の聖宗に侵され援を宋の太宗に請ひて得

さりしかは成宗は契丹に降りて宋と絶てり既にして康兆か穆宗を弑し顯宗を立つるに及ひ契丹の聖宗は問罪の師を出して高麗を伐ち顯宗は宋に通して之を防きしか力敵せすして遂に降れり（一〇一九年）其後文宗に至り宋の仁宗の盛世を慕ひてまた使聘を宋に通せしか封爵は常に契丹より受けたり

高麗金の關係

高麗は既に女眞と交渉を起せしか睿宗に至り大に女眞を破りて悉く高麗の故地を取れり（一一〇六年）然るに女眞の侵寇甚しきを以て睿宗は其侵地を還して和を結へり既にして金の太祖起りしか志遼を圖るにあれは務て和を高麗に求め睿宗も交を金遼に並ひ修めて邊境の無事を圖りしか金か遼を滅し宋を破るに及び仁宗は金の封爵を受けて之に臣事せり

高麗の內訌

時に高麗は紀綱既に紊れて李資謙は威福を弄し又僧の妙清は西京に叛せしか毅宗立ち文臣を揚けて武臣を斥くるに及ひ鄭仲夫等は憤惋して亂をなし遂に毅宗を廢して明宗を立てしかは（一一七一年）金甫當趙位寵相次きて義兵を擧けしか皆敗亡し鄭仲夫等は益〻跋扈して貪饕厭くことなし既にして崔忠獻はまた勢威を振ひ頻に廢立を行ひて高宗を立てしか高麗の國力は遂に衰へたり

第四十課　宋代の中兩亞細亞及印度

サマニ朝の興起

大食はマムン（ハルンの子）の時より勢威漸く衰へて土耳其（突厥）の將士はハリファを玄弄し地方の豪族は所在に割據せり波斯のサマニ朝はホラサンの地に起り（八七四年）北は天山より南は波斯灣に至るの地を併せしか程なく勢を失へり

ガズニ朝の興起

土耳其のガズニ朝はガズニに起り（九六〇年）西はホラサンを侵

し東は北印度を略せしかマームード出てゝ北はアム河より南は波斯灣に至るの地を併せ又印度に侵入して佛、ヒンド兩教の堂像を毀ち西、北、中三印度に君臨せり然るに其死後一〇三〇年國勢頓に衰へたり

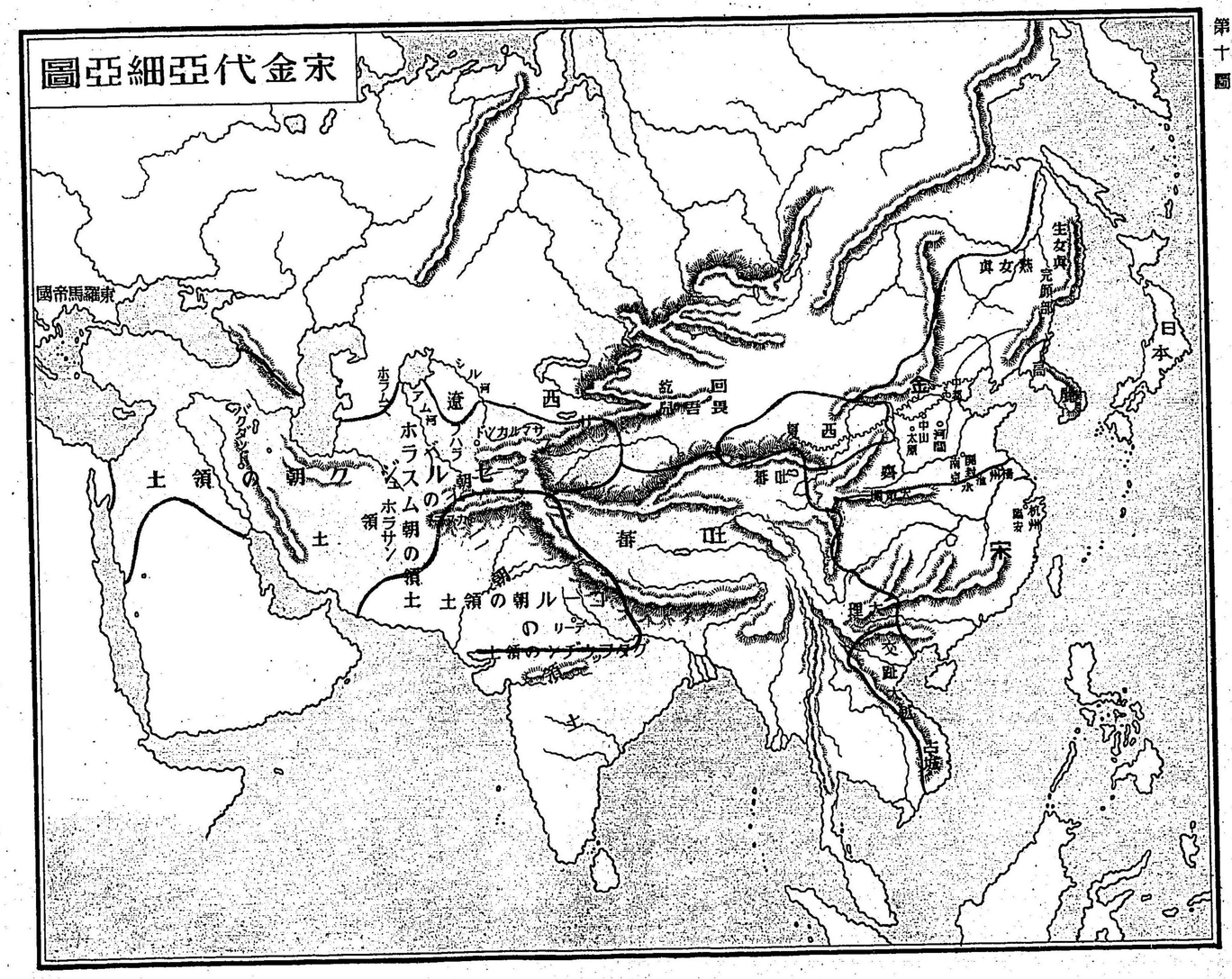
セルヂュク朝の興廢

土耳其のセルヂュク朝はブハラの地に起りトグルゝに至りガズニ朝を破りてホラサンを取り又バグダッドに進みてハリファの政權を奪へり一〇五八年其後メリクシャに至りイスパハンに都して東は喀什噶爾より西は小亞細亞に至るの地を有せしか其死後一〇九二年國勢頓に衰へ國土分崩して西遼、ホラスム、ゴール等起れり

西遼の興廢

遼の宗族耶律大石は宗國滅亡の際別失八里烏魯木齊に走りて畏吾兒同紇を服し更に西進してセルヂュク朝を破り天山南、北路、中亞細亞を併せて國を西遼と號し都をフスオルト河畔

第十圖　宋金代亞細亞圖


東羅馬帝國
日本
生女真
熱女真
元朝
高麗
金
中都
中山
太原
河間
開封
南京
杭州
臨安
宋
西夏
吐蕃
齊
楚
理
交趾
占城
回紇
畏吾兒
西遼
ドゾカルアウ
ホラサン
ホラスム朝の領土
ホラスム
ホラスム河
シル河
ブハラ
ヒバ
ボカラ
ルの領土
ルの領土
ルの領土

に定めたり（一一五年）其孫直魯克に至り國勢漸く衰へて畏吾兒、ホラズムに東西より侵さる時に乃蠻の部長屈出律は蒙古の太祖に逐はれて西遼に來投せしか程なくホラズムと結ひて西遼を簒へり（一一一二年）

ホラスム朝の興起

土耳其のホラズム朝は裏海の東邊に起りセルヂュク朝を滅して波斯を併せしかムハメットに至り西遼を滅してシル河以南の地を奪ひ又ゴール朝を破りて阿富干の地を取りサマルカンドに都して勢頗る盛なり

ゴール朝

阿富汗のゴール朝はヘラットの東南に起り阿富干、北中兩印度を併せて一時勢を振ひしか程なく其衰ふるに及ひ（一二〇六年）ホラスムは阿富干を取り土耳其のグタフウッヂンは印度を奪ひてデーリに奴隷朝を建てり

第四十一課　蒙古の勃興　太祖の西征

蒙古の興起

蒙古は蒙古種にして斡難、客魯連兩河の間に住し世〻遼、金に羈屬せしか部長也速該に至りて始て強し其子鐵木眞繼き泰赤烏、薩里乞克烈、乃蠻、吉利吉思、塔々兒の諸部を破りて略〻内、外蒙古の地を併せ遂に大汗の位に斡難河上に卽き成吉斯汗と號せり（一二〇六年）之を蒙古の太祖となす

太祖の南侵

太祖は是より乃蠻の部長屈出律を西遼に逐ひ西夏の李安全を降し（一二〇九年）又斡亦剌、畏吾兒の諸部を服し略〻北方を平定せしかは勢に乘して金を伐ち河東、河西、遼西の地を略して遂に中都に迫れり金は宣宗新に立ちて和を請ひ太祖は之を許して一旦北歸せしが金が都を南京に遷すに及び再び南下して中都を陷れ（一二一五年）遂に黃河以北の地を併せたり

太祖の西征

太祖はまた西方を經略せむと欲し先づ哲伯等を遣し屈出律を攻滅して西遼の故地を收め次で自ら朮赤、察合臺、窩闊臺、拖雷の四子を率ひてホラズムに向へりムハメットは戰敗れサマルカンドを棄てゝ西走せしかば太祖は哲伯、速不臺に其追擊を命じ自ら諸子と共に中亞細亞、ホラサンを定め更にガズニに向ひてムハメットの子ヂェラルウッヂンを印度のデーリに追ひ印度河の流域を掠めて兵を歸せり（一二二四年）又哲伯、速不臺はムハメットを追擊して裏海の南邊に達し更に之を廻りてコウカサス山を踰ゑ土耳其の欽察部を滅し南露西亞の諸侯をアゾフ海邊に破り大に東南露西亞の地を掠めしが太祖の東歸を聞きて兵を歸せり

宋金西夏蒙古の關係

是より先き金が都を南京に遷すに及び宋は金に歲幣を納れず西夏は小故を以て金に敵し金の宣宗は蒙古の西征に際して南侵せり宋の憲宗は西夏と結びて頻に之と戰ひし

が金は哀宗立ちて宋西夏と和を約せり時に蒙古の太祖は西征より歸來し自ら西夏を伐ちて李睍を執へ（一二二七年）更に金を伐たむとせしが會〻病みて六盤山（甘肅省平涼府）に死し其第三子窩闊臺は諸王將に推されて大汗の位に卽き喀剌和林に都せり之を太宗となす

第四十二課　太宗の南略　拔都の西征

金の滅亡

太宗は太祖の遺志を紹ぎ弟拖雷と共に金を伐ちて南京に迫れり金の哀宗は質を納れて和を請ひしが程なく蒙古の使を殺しゝかば太宗は宋と金を挾攻せむことを約し南京を圍みて哀宗を蔡州（河南省汝寧府）に走らせたり宋の理宗は孟珙を遣し蒙古の兵と之を挾攻して遂に金を滅し（一二三四年）勢に乘じて北方の恢復を圖り開封洛陽を復せしが蒙古の闊端等道を分ちて南征し河淮の間是よりまた寧日を見ず

高麗の服從

高麗は高宗位に在りて崔瑀政を擅にし國勢頗る衰へて遼の遺族に侵され援を蒙古の太祖に借りて之を平げ爾來好を蒙古に通ぜしが後ち蒙古の使を殺しゝため太宗に征伐せられて京城陷り高宗は既に難を江華島に避けしが遂に質を納れて和を請へり（一二四一年）

拔都の西征

太宗はほゞ東方を平定するに及び拔都を遣して西方を經略せしむ拔都は斡耳朶、海都、貴由、蒙哥、速不台等と共に阿爾泰山麓に沿ひて西進し行〻沿道の諸部を降して遂にエテルガル河に達せり是より拔都はブルガルを服し欽察部を略しモスクヴァ、キエフを降して遂に露西亞の地を悉く定めたり（一二四〇年）拔都は是より海都にポーランド、シレジア等の連合軍をリーグニッツに破り（一二四一年）モラヴィアを掠めて匈牙利に自ら匈牙利に向へり海都はポーランド、シレジア等の連合

向ひし拔都の軍に會せり拔都は匈牙利王をサヨ河に破り進みてペストを陷れ軍を分ちて墺太利を侵し又ダルマチアを掠めしが會〻太宗の訃音に接して東歸せり

第四十三課　憲宗の南征　旭烈兀の西征

憲宗の卽位

太宗死し諸王將は其長子貴由を大汗に推立せり之を定宗となす定宗程なく死し諸王將は更に拖雷の子蒙哥を大汗に推立せり之を憲宗となす是に於て太宗の一族は之を悅ばずして頗る不穩の擧動をなしゝかば憲宗は其首謀者を誅し海都等の封を阿爾泰山附近の地に移せり

大理吐蕃安南の平定

憲宗の弟忽必烈は漠南を總治せしが自ら南征して大理を滅し吐蕃を服し（一二五三年）更に兀良合台に安南征伐を命ぜり大越は李天祚に至り國內殷盛にして互市を緬暹及南洋諸國と開き宋の孝宗より始て安南の國號を受けしが其死後國勢漸く衰へて女王李佛金に至り其夫陳日煚は禪を受けて外は占城を破り內は國政を整へしが兀良合台の來寇するに及びて貢を蒙古に納れたり（一二五八年）

旭烈兀の西征

中、西兩亞細亞は太祖の東歸後漸く亂れしかば憲宗は弟旭烈兀をしてまた西征せしむ旭烈兀はアム河畔に至りて兵を整へバグダットに進みてハリフを降し（一二五八年）別に將を遣してカシミルを伐たしめ自ら西進してシリアを畧し更にミスル（埃及）に向はむとせしが會〻憲宗の訃音に接して軍を收めたり

憲宗の南征

憲宗は弟阿里不哥を喀喇和林の留守とし自ら兵を率ひて忽必烈、兀良合台と三面より宋を伐てり時に宋は理宗尙ほ位に在りて賈似道政を專にせしが窃に使を忽必烈に遣し

臣を稱し地を割き幣を納めむことを約して和を請へり忽必烈は憲宗既に死して阿里不哥か立たむことを謀ると聞き暫く宋の和を許して北歸し開平（直隸省多倫諾爾廳）に至りて大汗の位に卽けり（一二六〇年）之を世祖となす

阿里不哥の叛

時に阿里不哥は援を窩闊台、察合台の一族に得て自ら大汗と稱し世祖と相爭ふこと五年遂に窮蹙して降れり是に於て世祖は都を大都（燕京）に定め國號を元と改めたり（一二七一年）

宋の滅亡

第四十四課　世祖の一統及外征

宋の賈似道は講和を秘して大捷を謬り奏し頻に理宗の恩遇を蒙りしが蒙古が前約を徵するに及びて其使を拘留せり阿里不哥敗亡の後世祖は宋の樊城、襄陽を降し更に伯顏を將として南征せり時に宋は恭宗立ちて賈似道を貶し文天祥張世傑等の兵を徵せしが伯顏が臨安に迫るに及びて

遂に降れり（一二七五年）是に於て端宗は福州に立ち陸秀夫、文天祥、張世傑等は頻に回復を謀りしが皆なならず端宗は各地に轉遷して死し帝昺立ちしが文天祥は虜となり張世傑は崖山に破れ陸秀夫は帝昺を負ひて海に投ぜり（一二七九年）是に於て宋全く亡ぶ

世祖の東侵

高麗は元の外藩となり之に事へて頗る恭順なりしが日本は尙ほ之に使聘を通ぜず世祖は高麗の元宗を介して屢〻日本の使聘を促さしが鎌倉の執權北條時宗は皆な之を斥けぬ世祖因て元、高麗の戰艦を合せ對馬、壹岐を侵さしが暴風に遇ひて多く戰艦を失ひ空しく敗歸せり（一二七四年）世祖はまた杜世忠等を遣して日本を諭さしめしが北條時宗之を斬りしかば宋の滅亡後大兵を發し范文虎等を將として九州を侵さしが日本の兵能く防ぎて上陸する能はず暴風ま

た俄に起りて概ね戰艦を覆沒せり（一二八一年）

世祖の南征

緬は緬甸にしてバガンを都としアラカン、ペーグを併せ又暹を略して勢強く元の招諭を拒めり世祖因て兵を發し征伐二回にして遂に之を降し（一二八三年）更にアッサム、暹等を服せり占城も元の招諭を拒みしかば世祖は先づ海兵を發して之を伐ち次で安南を經て之に向はむとせり然るに安南の陳日烜之を拒みしかば先づ安南を伐ちて其和を許し（一二八八年）次で占城を服せり其他世祖はスマトラ、マラバール等を招致し又ジャワを征伐して威を南洋諸國に振へり

第四十五課　元の版圖　東西兩洋の交通

元の版圖

是に於て蒙古の版圖は前古に超越し東は日本海に臨み西は匈牙利に達し南は占城を極め北はシベリアの南部を包

む東南は至る所漢唐に下らず西北は則ち之に過ぎたり世祖は支那本部、滿州、內外蒙古、青海、西藏及中亞細亞を直轄し高麗、安南を羈屬し欽察、伊兒、察合台、窩濶台の四汗國を統御せり

四汗國

欽察汗國（又金黨汗國）はシル河以西匈牙利以東の地を領してサライ（河畔）を都とし拔都の子孫之を治む伊兒汗國はアムウルミア（湖東）を都とし旭烈兀の子孫之を治む察合台汗國はシル河以東天山附近の地を領してアリマリ（伊黎）を都とし察合台の子孫之を治む窩濶台汗國は阿爾泰山附近の地を領してエミル（河畔）を都とし太宗の子孫之を治めたり

元の內治

元は國初以來諸事草創にして官制もまた簡なりしが世祖に至りて新に官制を定め中央に中書省（政務を總ぶ）樞密院（兵柄を秉）

る御史臺（監察を司る）等を置きて軍國の事を統べしめ諸官の長には必ず蒙古人を用ひ次官以下には漢人、畏吾兒人、波斯人、伊太利人等を用ふ又地方に行省（嶺北、遼陽、征東、河南、陝西、甘肅、四川、雲南、江浙、江西、湖廣、安南、阿母）元帥府（阿里麻里、別失八里、曲先）を置きて邊陬各地を治めしむ其他學制、稅法等は略〻前代の制に由りしが喇嘛基督、ムハメット等の諸宗教を自由にせり

東西兩洋の交通

蒙古は歐亞兩洲の地に一大帝國を建て官道を開き宿驛を設けて交通を便にせしかば東西商賈の往復頓に頻繁となり陸路は哈喇和林、大都より天山南路、中亞細亞を經て又天山北路、シベリアを經て西亞細亞、歐羅巴に通じ海路は泉州、福州より南洋諸島を經て印度、波斯に通ぜり之に加へて學者、軍人等も陸續支那に渡來し西方の天文、數學、砲術等を傳へ又支那の羅針盤、活版術等を西方に傳へたり

第四十六課　海都の興亡　元代の治亂　欽察、察合台、伊兒三汗國の盛衰

海都の興亡

窩濶台汗國は海都之を統べ欽察汗國は別兒哥に至り勢を歐洲に振ひて忙哥帖木兒繼ぎ又察合臺汗國は汗位屢〻更迭して八剌に至れり海都が世祖に抗するに及び三汗國互に紛爭を生ぜしが程なく相和して海都を大汗に推立し（一二六九年）共に世祖と伊兒汗阿八哈とに敵せり其後ち海都は恣に察合台汗を任じ又滿州の諸王を誘ひて屢〻元を侵し成宗立つに及び大擧して東侵せしが戰敗れて死せり（一三〇一年）其子察八兒は察合台汗と共に歸順せしが程なく背きて武宗に攻滅せられたり（一三〇八年）是に於て數十年の紛爭全く熄みしが三汗國は遂に獨立しぬ

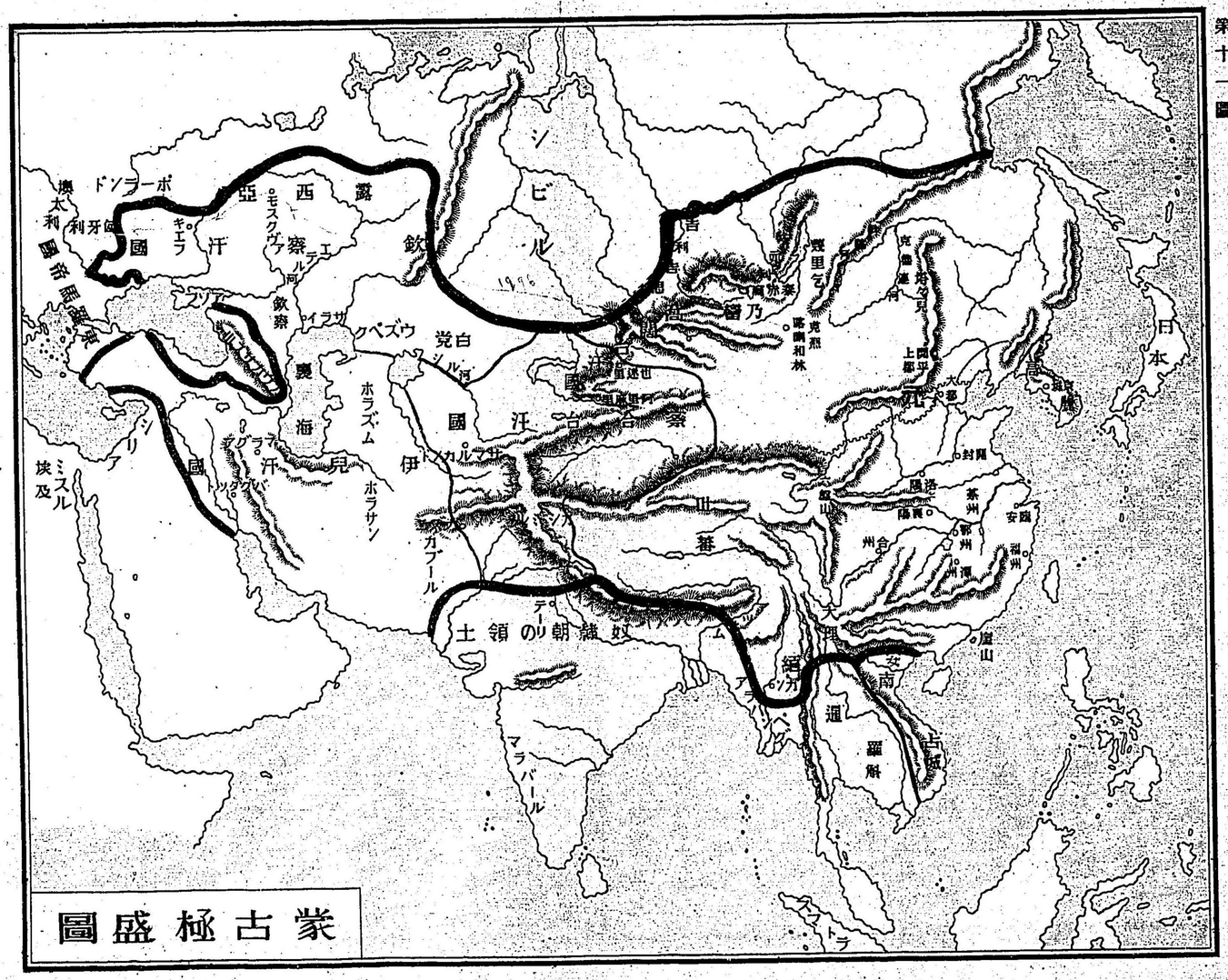
元室の衰微

成宗以後元室は繼承毎に紛議を生じて權臣專恣の因をなせり脫脫は武宗の政を執りて舊章を變亂し鐵木迭兒は英宗を立て、專恣を極め鐵失は拜住を殺し英宗を弑し燕帖木兒は文宗を立て、勢威を一世に振ひ伯顏は順帝の政を恣にし脫々之を除きて政を執りしが財政既に亂れて賦斂また重く喇嘛は寵を恃みて驕橫を極む是に於て元室の威嚴大に失せて漢人の釁を覘ふもの各地に崛起せり（一三四七年）

朱元璋の興起

朱元璋は金陵（江蘇省江寧府）に據りて江東を定めしが陳友諒、張士誠、方國珍を破りて遂に江の南北一帶の地を平げぬ是より朱元璋は意を南北に向け南は福建、兩廣の地を徇へ北は徐達、常遇春を遣して順帝を上都（開平）に逐ひ遂に帝位に卽きて國を明と號せり（一三六八年）之を明の太祖となす

第十一圖


シビル
ドンラーボ
奧太利
伊牙利
國帝國
キエフ
モスクヴア
亞西
露
汗
察テエル河
欽察
欽
ブリア
イラク
クベズウ
白党
ジル河
ホラズム
國
汗
台
察
奴隸朝の領土
ミスル
埃及
ガブール
ホラサン
伊
兒
海
ペルシヤ
ボグダッド
カルバラ
ムスリム
ヒラ
ムハンマド
ムハンマド
ムハンマド

三汗國の盛衰

時に三汗國の勢も大に衰頽せり欽察汗國はウズベクに至り一三一三年婚をミスル、東羅馬、モスクヴァ等と結び又好を歐洲諸國に通じて大に勢を振ひしが其後ち弑虐相踵ぎて拔都の正統絶え白党、ウズベク、グリムの三汗は互に欽察汗の位を爭ひ又モスクヴァの大公は漸く獨立の姿をなせり伊兒汗國はカサン出で、法度を整へ又好を歐洲諸國に通して勢を張りしが其死後一三三〇年國勢漸く衰へてホラサン、シリアは遂に獨立せり察合台汗國は察八兒の滅後大に窩闊台汗國の領土を併せしが暴君更〻出で、叛亂屢〻起り國土も遂に殆ど崩解せり

第四十七課　明の初世

太祖の創業

明の太祖は海内の一統を企て、兵を北西二方に出し北は元の將を山西、陝西の地より逐ひ元の遺族を喀喇和林に走

らし滿州の蒙古諸族及元の遺族を破りて遂に漠南滿州の地を定めまた西は明昇を降し元の梁王を滅し大理、金齒の諸蠻部を服して遂に四川、雲南の地を定めぬかくて太祖は元の俗を變じて唐宋の舊に復せむと欲し制度を定め律令を改め儒學を重くし租稅を輕減せり又封建の制を立てゝ諸子を要地に分封し身後の變を慮りて功臣を誅除し宦官の禍に懲りて之を薄待せり

靖難の變

太祖死して惠帝立ち諸王の强大を憂ひて之を抑制せむとす燕王朱棣は兵を北平（北京）に擧げて靖難と號し南進して南京を陷れ惠帝の踪跡明かならざるを機として自立せり（一四〇二年）之を成祖となす成祖は是より諸王の地位を復し大に國政を治めて民庶を安くし又安南、韃靼を伐ちて武威を輝せり

安南の平定

安南は陳皇に至り始て好を明に通ぜしが其後ち黎季犛は簒立して國を大虞と號せり明の成祖は其子黎漢倉に封爵を與へしが程なく大虞を滅して安南に交趾布政司を置けり（一四一四年）是に於て占城、老撾、暹羅、眞臘、琉球等の南方諸國多く明に來貢せり

韃靼の征伐

元は坤帖木兒に至り部屬離散して勢大に衰へ鬼力赤は其位を簒ひて韃靼可汗と號せり（一三九九年）程なく阿魯台は之を殺して本雅失里（坤帖木兒の弟）を立てしが明の招諭を斥けて成祖に幹難河畔に擊破せられ瓦剌（斡亦剌）の部長馬合木は答里巴（本雅失里の子）を立てゝ阿魯台に迫れり阿魯台は窮蹙して明に降りしかば成祖は之と共に瓦剌を伐ちて馬合木を降し（一四一五年）遂に蒙古一帶の地を服して都を北京に遷せり

第四十八課　帖木兒大王の兼併

帖木兒の興起

帖木兒は蒙古の疎族にして察合台汗の部將なりしが其衰微に乘じ中亞細亞を奪ひて汗位にサマルカンドに卽き（一三六九年）東は葱嶺以東にある察合台汗の領土を收め又好を明の太祖に通じ西はホラズムを定め又ホラサン、波斯を略して伊兒汗の領土を併せたり

帖木兒の北征

帖木兒は曩にクリム汗ドクタミシュを援けて欽察汗となしゝがドクタミシュが露西亞の諸侯を服し勢に乘じてホラズムを侵さしかば大に怒りて北征し（一三九〇年）先づドクタミシュをエテル河畔に破り次でムスクワを掠め遂に白黨汗を欽察汗に立てゝ歸り更に兵を印度に出せり

帖木兒の南征

印度は奴隸朝衰へてギルジ朝興り（一二九八年）アラウッヂン出で西、北、中三印度を定め又南印度を略せしが其死後國勢頓に衰へトグラッグは兵を起してトグラッグ朝を建てしがムハ

メットに至りヒンド教徒の叛亂は屢〻中印度に起り又ヒンド教徒のヴィヂャナガル朝及ムハメット教徒のバーマニ朝は南印度に起りて國内大に紛亂せり帖木兒は之に乘じて印度に侵入し（一三九九年）デーリを陷れて掠奪を恣にせしが猝に兵を班して西征せり

帖木兒の西征

土耳其は曩に蒙古の太祖に裏海の東邊より逐はれて西走せしがオトマンに至り伊兒汗國の衰微に乘し小亞細亞の地を略して遂に土耳其帝國を建てゝ（一二九九年）是より土耳其は益〻勢を振ひてバヤジードに至り西は匈牙利を侵し東羅馬に迫り東は埃及と結びて帖木兒の領土を侵さむとせり是に於て帖木兒は印度よりシリアに向ひ先づ埃及の兵を破りて後顧の憂を除き次でバヤジートをアンゴラに破りて之を擒にし（一四〇二年）悉く小亞細亞の地を定めて東歸し

帖木兒の死

たり

帖木兒は是より明を滅さむと欲して東征の途に上り成祖も之を聞きて其備をなしゝが會〻帖木兒はオトラールに至りて死し（一四〇五年）諸子位を爭ひて內難を生ぜしが帖木兒の末子シャハルルクは中亞細亞を定め土耳其は小亞細亞を復しドグラク朝はデーリに歸れり

第四十九課　明の中世

宣宗の治

明は宣宗に至り藩王の反、交趾の亂ありしが楊子奇、楊榮、楊博等能く政を輔けて海內を承平ならしめたり然るに英宗立つに及び宦官王振は權を專にし瓦剌部の親征を勸めて遂に土木（直隸府宣化府）の變を招けり

土木の變

瓦剌、韃靼の二部は漠北に對立せしが瓦剌の部長脫歡は韃靼部を破り脫〻不花を立て、可汗とせり其子也先繼ぎ兀

良哈部を降し哈密を略し遂に明に入寇して英宗を土木に擒にし（一四四九年）更に進みて北京に迫れり然るに于謙は景帝を立て、之を却けしかば也先は程なく英宗を還して和を結び次で自ら可汗となれり其後ち也先か弑害に遇ふに及び韃靼の部長孛來は毛里駭と謀りて麻兒可兒（脫〻不花の子）を可汗とせり（一四五四年）是に於て瓦剌部の勢遂に衰へぬ

宦官の禍

英宗、景帝は相協はざりしが宦官曹吉祥等は景帝の不豫に乘じ英宗を位に復して威福を弄せり憲宗繼ぎ宦官汪直また事を用ひしが孝宗は佞臣を斥けて朝政の清明を圖り又土魯番を伐ちて哈密を經理せり然るに武宗の時宦官劉瑾は威福を弄し世宗の時奸臣嚴嵩は寵遇を擅にして益〻朝政を濁亂せり時に南北の外寇正に盛となれり

韃靼の寇

韃靼は達延可汗出で、諸部を一統し頻に明の邊境を侵し

しが孝宗の時大擧して固原、寧夏に寇せり一五〇年其死後季子札賚爾は外蒙古を領し又嫡孫卜赤は可汗となり次子巴爾色は吉囊副王となりて內蒙古を分領し世宗の時頻に明を侵せり巴爾色の子究弼里克繼ぎて吉囊となり弟俺答と共に河套に據りて屢〻明を侵し、が其死後俺答代りて其衆を領し屢〻直隸、山西、陝西の地を掠めたり

第五十課　交趾の叛服　沿海の寇盜

大越

交趾は明の施政を悅ばず黎利は兵を擧げて明兵を退けしが宣宗と和して外藩となり位に交都東京に卽きて國を大越と號せり一四三一年黎灝に至り占城、緬甸を服し老撾、明を侵して頗る勢を振ひしが其後ち莫登庸は黎椿の位を簒ひて明の內藩となり阮淦は黎寧を奉じて淸華に據れり是に於て大越は南北に分れぬ一五七二年

緬甸

緬甸は明に貢し又大越に通ぜしが明の英宗が麓川部を伐つに當り其部長を執へて明に送りしかば孟養の部長は之を怒り緬甸を侵して國都を陷れぬ一四九三年既にして莽瑞體起りペーグ、アウヴを定め孟養、木邦を降し老撾、暹羅を從へて勢頗る强く莽應裏繼ぎて明の南境を侵し、が神宗に擊破せられて大に勢を失へり

暹羅

暹羅はもと暹、羅斛の二部に分れしが元の末相合してユーヂアを都とし貢を明の太祖に修めぬ其後ち暹羅は緬甸の莽瑞體に制せられしがプラナレー出で、先づ緬甸の羈絆を脫し次で眞臘を伐ちて勢を振へり

朝鮮の興起

高麗は恭愍王に至り元の羈絆を脫して貢を明に修めしが叛服常なきを以て其鐵嶺以北の地を奪はれぬ辛禑繼ぎて之を復せむとせしが李成桂は之を廢して恭讓王を立て次

で其位を簒ひて明の太祖の封冊を受け漢陽に都せり一三九二年之を朝鮮の太祖となす

元の末日本西陲の民は頻に高麗、支那の沿海を侵掠せり之を倭寇と云ふ高麗の恭愍王及辛禑、明の太祖は皆な倭寇の禁遏を日本に請ひ且明の太祖は沿海に衛所を設けしが成祖が足利義滿と和親するに及び其患は暫く絶えて交通貿易もまた開けたり後ち明の奸商が日本の商民を詐くに及び倭寇再び起りて頻に東南一帶の沿海を侵掠し世宗は全力を其斥攘に盡し、か更に功なく戚繼光、俞大猷等が之を擊破するに及び一五六三年其患始て熄みしが其殘黨は尚ほ臺灣に據りて沿海に出沒せり

倭寇

朝鮮の役

第五十一課　明の末世

倭寇の再起以來朝鮮、日本の交通は絶えしが豐臣秀吉は朝鮮に來貢を促し且征明の嚮導を命ぜり朝鮮の宣祖が之を拒むに及ひ秀吉は大兵を出して殆ど朝鮮全土を略せり一五九二年明の神宗は朝鮮の危急を聞きて援兵を出し、が平壤碧蹄館に連敗せしかば大に恐懼して和を日本に請へり然るに媾和の條件一致せず秀吉はまた大兵を出して頻に明と朝鮮に戰ひしが會ゝ秀吉死して日本の兵は歸國し一五九八年朝鮮は僅に國命を保ち明も侵寇を免れしが二國共に衰耗し殊に明は程なく黨爭を生じて大に國政を亂せり

黨爭の因

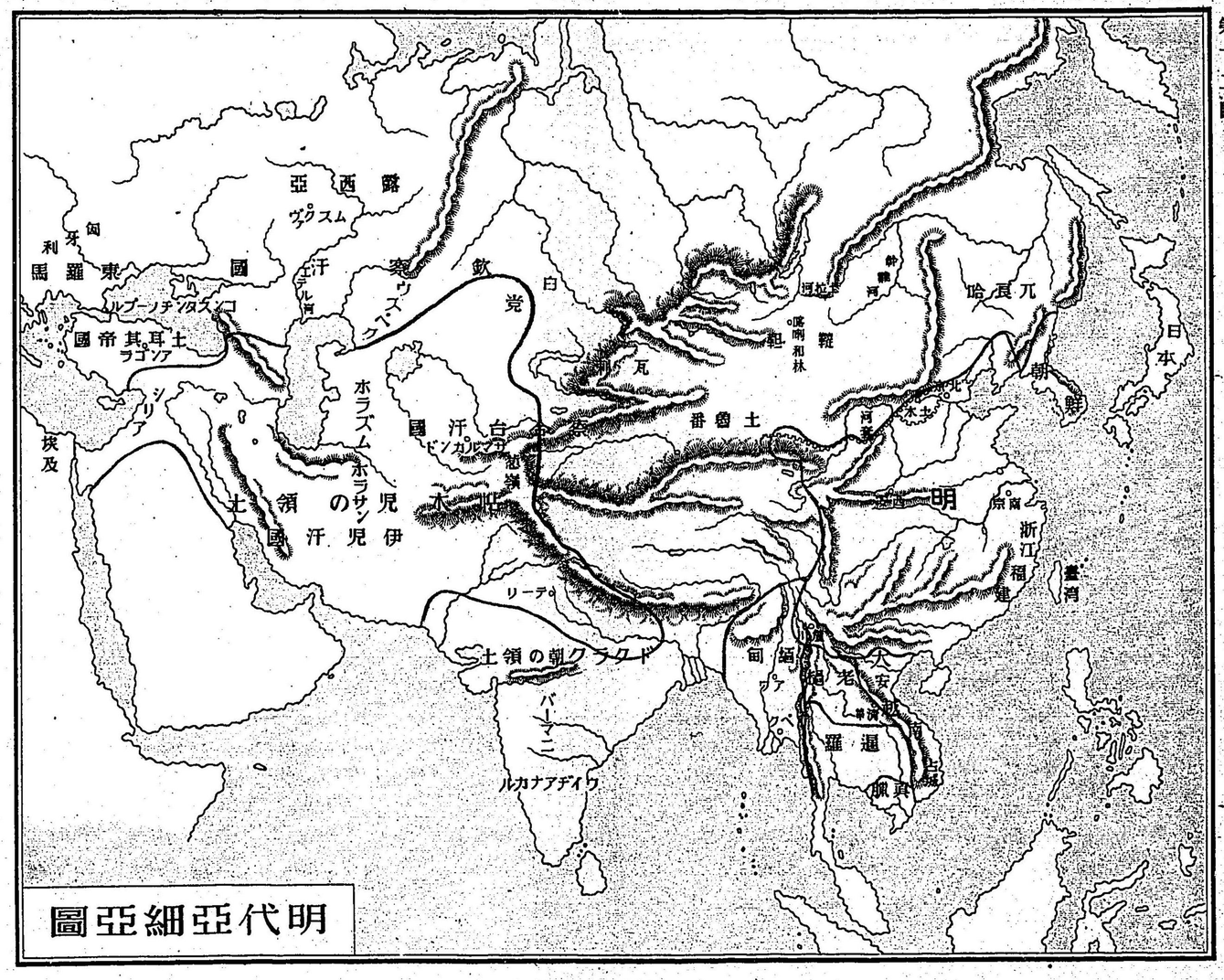
明の學藝は元に優り詩文に宋濂、高啓、李夢陽、何景明、李樊龍、王世貞等出で詞曲小說にも名家出でしが宋學最も盛にして薛瑄、胡居仁は程朱を信じ陳獻章は陸九淵に近く王守仁は陸九淵を主とし共に人心を敎化せしかば當時の學者は皆な義理を尙び時政を論議し遂に黨爭の因をなせり

東林の獄

顧憲成、鄒元標、趙南星は事に依り神宗に斥けられて皆な鄉里に歸り顧憲成は學を東林書院に講じて傍ら時政を論じ又人物を評し鄒元標、趙南星も遙に之に應ぜしかば氣節を負ふもの多く之に和附せり當時の執政は痛く之を排擊して遂に東林、非東林の二黨を生じ互に政權を爭ひしが神宗崩じ光宗を經て熹宗に至り東林黨は三案（挺擊、紅丸、移宮）の爭に克ちて非東林黨を斥けぬ然るに宦官魏忠賢は非東林黨を助け疑獄を起して大に東林黨を殺しゝが毅宗立ちて之を誅せりされど朝政は全く紊亂して收拾すべからざるに至れり

明の滅亡

時に流賊は飢饉と重斂とによりて陝西の地に蜂起し（一六二八年）張獻忠、李自成は之を率ひて各地を掠めしが張獻忠は湖南、四川を略して成都に據れり李自成は陝西、河南を略して



西安に據りしが更に山西を略して北京に向ひ毅宗が自刎するに及びて自ら帝位に卽けり（一六四四年）

第五十二課　ムガール帝國の盛衰

帖木兒の後裔

明の中世に當り帖木兒の玄孫アブセイド起りて中亞細亞を統へ（一四五二年）更に兵を用ひて天山よりチグリス河に至る地を併せしが其死後國土分裂して帖木兒の後裔は各地に割據しウスベクの部長は中亞細亞を占領し又サフヽ朝は波斯に興起せり（一五〇二年）既にしてアブセイドの孫バーベルはカブールに起り援をサフヽ朝に借りてウスベクの部長を破りしが遂に志を中亞細亞に得ずして更に意を印度に注げり」

バーベルの業

帖木兒の退去後印度のドクラク朝はまたデーリに君臨せしが程なく亡びて阿富干のローデ朝興れり（一四五〇年）されど國勢振はずして獨立を謀るもの多し是に於てバーベルは

印度に侵入しデーリを陷れてロージ朝を滅し（一五二八年）更に兵を用ひてラヂプト族を服しアム河より恒河に至る地を統へてムガール帝國の基礎を建てたり

フマーユンの挫折

バーベル死してフマーユン繼ぐに及び弟カムランはカブールに叛しベンガル汗はフマーユンを破れりフマーユンは波斯に走りてサフィ朝の援を借り先づカムランを破りてカブールを定め次でベンガル汗を滅してテーリを復せり」

ムガール帝國の建設

フマーユン死してアクバル繼ぎ（一五五六年）都をアグラに定めてアム河よりヴィンドヤ山に至る地にムガール帝國を確立し又意を内治に注ぎて制度を整ひ文學を興し農工を勸め且各教徒に宗教の自由と政權の平等とを許せりかくてアクバルは南印度を經略せむと欲し屢〻南征の師を出しゝが遂に志を達せずして死せり（一六〇五年）

ムガール帝國の盛衰

アクバルより二傳してシャージハンに至り印度河以西の地は波斯に奪はれしが南印度の大部は帝國の版圖に入れり（一六五九年）アウランゲセブ繼ぎテーリに都して南印度を略し殆ど全半島に君臨せしがヒンド教徒を抑壓せしを以てラヂプト族は漸く離叛しマーラータ同盟は南印度に起れりアウランゲセブ因て自ら大軍を率ひ頻に其同盟を伐ちしが遂に平定する能はずして死せり（一七〇七年）是より暗君相繼ぎ簒奪また屢〻行はれムガール帝國の威嚴大に衰へて各地の藩王は獨立の姿をなし遂に歐洲人の乘ずる所となりぬ

印度に於ける葡萄牙人

第五十三課　葡萄牙西班牙の東略　天主教の東流

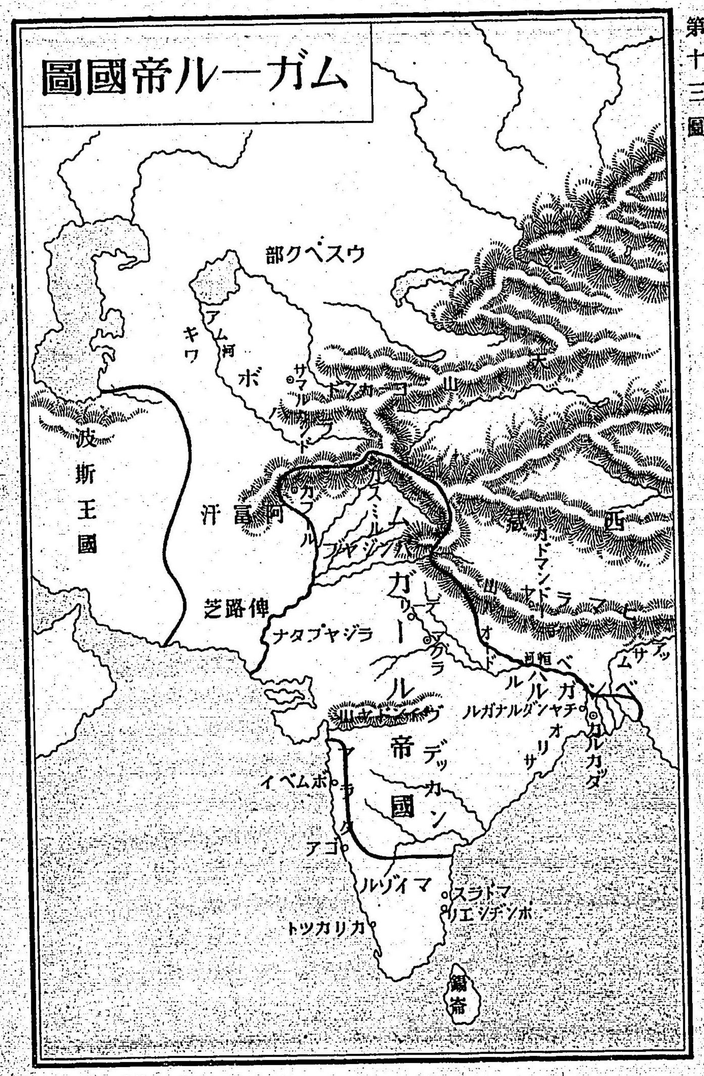
土耳其が帝國を歐亞の地に建てゝ東西兩洋の交通を斷つ

支那日本に於ける葡萄牙人

に及び歐洲人は頻に東洋に達する新航路の發見に勤めしが其先鞭を着けしものを葡萄牙人となす葡萄牙人は初め亞非利加の西岸を探撿せしがヴァスコ、ダ、ガマ出でゝ其南端なる喜望峰を廻り遂に印度の西岸なるカリカットに達せり（一四九八年）是より葡萄牙人は頻に印度に渡航して或は商館を設け或は土侯と爭ひしが遂に印度の西岸なるゴアに根據地を建て（一五一〇年）更に印度の東岸及錫崙に商館を開きマラッカ、ジャヴァを略し又暹羅と貿易を開けり

葡萄牙人は益〻東進して支那海に入り（一五一四年）遂に廣東、厦門、寧波に商館を設け阿瑪港（澳門）に根據地を建て（一五六三年）又日本に來りて薩摩の坊の津に貿易を開き又肥前の平戸に商館を設けぬ（一五九四年）かくて葡萄牙人は頗る勢を振ひて百有餘年間東洋貿易の利益を獨占せり

第十三圖


ムガール帝國圖
ウズベク部
ボ
ガンジス河
ヒマラヤ山
西藏
ガンジス河
ガンジス河
ガンジス河

東洋に於ける西班牙人

西班牙人は葡萄牙人に倣はず別に東洋に達する航路を發見せむと欲し西航して先づコロムバスの新大陸發見となり次でマゼランの地球一週となり遂にフィリッピン群島を占領してマニラをルーゾンに建てぬ（一五七一年）是より西班牙人は明と通商を企てしが葡萄牙人の妨害に遇ひて其意を達せず日本とは平戸に商館を設けて貿易を營めり（一五八〇年）

天主教の東流

東西兩洋の交通が葡萄牙人の力によりて一度開くるや基督教の宣教師も漸く印度に來りて布教に從事せり時に基督教徒は新舊二派に分れ舊教徒は勢を歐洲に失ひて頻に東洋に向ひしがジェシュイト派（舊教徒）のサヴィエルはゴアに來り次でマラッカを經て日本に行き（一五四九年）平戸、京都、及周防、豐後の地に布教せり既にしてマテオ、リシ（利瑪竇）は廣東に來りて布教に從事せしが次でハントチヤ（龐迪我）と共に北京に至り

一六〇一年　明の神宗の厚遇を受けて頻に天主の教を說けり是よりロンゴバルヂ（龍華民）アダム、シャル（湯若望）等は陸續明に來りて布教に從事し兼て天文、曆法、砲術等を傳へたり

第五十四課　清の開國　世祖の一統

滿州の興起

明の東北に通古斯種居りて黑龍江、東海、長白山滿州、扈倫の五部をなせり滿州部の屬部覺羅は初め鄂多理（寧古塔の西南）に居りしが後ち赫圖阿拉（盛京省興京廳）に移るに及びて漸く勢を作せり部長努爾哈赤出でゝ先づ滿州部を定め次で長白山、扈倫、東海の四部及蒙古の科爾沁部を服し遂に國を滿州と號して帝位に卽けり（一六一六年）之を滿州の太祖となす是より太祖は扈倫部の屬部葉赫を滅し明、朝鮮の援兵を破り遂に都を瀋陽（盛京省奉天府）に定めて北は黑龍江より南は朝鮮に接し西は遼河より東は日本海に至る地を併せたり

清の南侵

太祖死して太宗繼ぎ明を侵して諸城を下し朝鮮を伐ちて仁祖の和を許し又韃靼を破りて漠南蒙古を定め遂に國號を清と改めぬ（一六三四年）是より太宗は朝鮮の仁祖を降して封爵を授け（一六三六年）明の北邊に迫りて其將吳三桂を破り又毅宗の和議を斥けて深く內地を掠めぬ太宗死して世祖立ち吳三桂と相防ぎしが會〻北京陷落して毅宗自殺し吳三桂が援を請ふに及び之を援けて李自成を破り遂に直隸、山西の地を定めて都を北京に遷し更に兵を出して李自成を陝西に平げ又河南、山東を略せり

清の一統

時に明の福王は既に南京に立ちて史可法之を輔けしが清軍は之を攻め降して辮髮の令を布けり是に於て唐王は福建に立ち魯王は浙江に據りしが清軍はまた魯王を破り唐王を執へ更に廣西に立ちし桂王を先づ雲南に逐ひ次で緬

甸に走せたり（一六五八年）是より先き鄭成功は明室の恢復を志して厦門に據りしが魯王が來るに及び之を扶けて浙江南京を復せり然るに程なく戰利を失ひてまた厦門に退き更に荷蘭人を逐ひて臺灣に據れり（一六六一年）時に世祖死して聖祖立ち桂王を緬甸に捕へて全く明を滅し略〻海内を一統せり（一六六二年）

第五十五課　清聖祖の業

三藩の反

清は明の降將吳三桂を雲南に耿繼茂を福建に尚可喜を廣東に封じて文武の二權を授けぬ之を三藩と云ふ會〻撤藩の事起りて吳三桂先づ叛き（一六七三年）耿精忠（耿繼茂の子）尚之信（尚可喜の子）の相次で起り臺灣の鄭經もまた之に應じて起り江南の地全く亂れぬ聖祖因て諸將を分遣し頻に之を征討せしかば尚子信耿精忠は相次で降り吳三桂は勢日に縮蹙して死し其子吳世璠繼ぎしか戰敗れて亡び臺灣もまた降れり（一六八三年）

喀爾喀部の平定

聖祖は是より北に向ひて先づ露西亞と（尼布楚）子ルチンスク條約を結び次で漠北を經略せり時に喀爾喀部は三汗（車臣、札薩克圖、土謝圖）に分屬し又厄魯特（瓦剌）部は四部（準噶爾、都爾伯、土爾扈、和碩）に分れしが準噶爾の部長噶爾丹出でゝ厄魯特全部を統べ次で天山南路、青海、西藏を略し遂に喀爾喀部を併せて屢〻清の北邊を擾せり聖祖は親征して大に之を昭莫多（土拉河の南）に破り（一六九七年）噶爾丹の姪策妄阿拉布坦は準噶爾を奪ひしかば噶爾丹は窮迫して遂に自殺し阿爾泰山東の地悉く清に歸せり

西藏の鎮定

喇嘛教は西藏を本土とし紅、黃二派に分れて黃派は達賴喇嘛の統管に屬せり明の末和碩の部長は黃派を援け青海に

據りて西藏の兵權を握り好を清に通ぜしが達賴喇嘛の執政桑結は援を噶爾丹に借りて和碩部の勢を挫けり噶爾丹の敗亡後和碩の部長拉藏汗は桑結を攻殺し新に達賴喇嘛を立てゝ聖祖の保護を受けしが策妄阿拉布坦が西藏に侵入して之を攻殺せしかは聖祖は兵を出して準噶爾の兵を逐ひ更に達賴喇嘛を立てゝ威を西藏に振へり（一七二〇年）聖祖死して世宗立つに及び和碩の部長は青海、西藏の喇嘛を誘ひて亂を起せしが清兵に擊破せられて準噶爾部に走れり（一七二四年）策妄阿拉布坦は之を納れて清に抗し其子策零繼ぎて喀爾喀部を侵しゝが三音諾顏部に破られて和を清に請へり

外蒙古

天山南北路の平定

第五十六課　清高宗の業

清は世宗死して高宗立ち勢益〻盛なりしが準噶爾部は策零死して國大に亂れ其族阿睦撒納は清に來りて其取るべきを言へり高宗は兵を出して之を平定せしが（一七五五年）程なく阿睦撒納が背きしかはまた兵を出して之を滅し更に喀什噶爾汗を破りて全く天山南北路を定め（一七六〇年）清の勢威を葱嶺以外に振へり

緬甸の征伐

清はまた力を西南の經畧に盡し世宗は雲南、貴州の蠻部を伐ち高宗は四川の金川蠻を服して遂に緬甸、暹羅、安南等と交渉を起せり緬甸は明の末アウ、ペーグ、アラカンの三國に分れしが清の初ペーグはアウを併せて勢を振へり然るにオングセヤ（雍籍牙）はアウを取りて緬甸王と稱し（一七五三年）更にペーグ、暹羅を滅し又アッサムを降せり此間緬甸は屢〻清を侵して高宗と戰ひしが遂に貢を納れて和を清に請へり（一七六九年）後ちボドアーブラー立ちてアラカンを降しゝが暹羅

を侵してファヤチャグリに破られたり（一七八五年）

暹羅

暹羅は明の末日本の山田長政を用ひて勢を振ひしが後ち内亂外患相次で勢また振はず一旦緬甸に滅されぬ（一七六七年）

大越

既にして漢人鄭昭（ファヤタークは緬甸が清と爭ふに乘じ大越、眞臘の援を得て緬甸の兵を逐ひ暹羅王と稱してバンコックに都せり（一七七七年）其後ち鄭昭は内亂に死してファヤチャックリ立ち（一七八二年）好を清に通じて高宗の封爵を受けたり

大越は明の末黎、莫二氏に分れしが黎氏の將鄭松は莫氏を攻滅して大越を一統し（一五九二年）其功を負ひて政を專にせしかば玩璜は之を惡み順化に據りて自ら廣南王と稱し（一六〇〇年）阮福晉に至りて占城、眞臘を畧せり其後ち阮文岳、阮文惠は兵を起して先づ廣南を滅し（一七七五年）次で大越を併せぬ（一七八五年）清の高宗因て黎氏を援け屢く阮文惠を伐ちしが遂に和を許して之に封爵を授けたり（一七八八年）

グールカの征伐

グールカ及子パールはヒマラヤ山南の蠻部なりしがグールカは子パールを攻滅し勢に乘じて西藏を侵掠せしかば清の高宗は兵を發してグールカを伐ち其首都カトマンドを陷れて之を降せり（一七九一年）

第五十七課　清の制度文物

官制

清の聖祖、高宗は武威を輝すと共に制度を整へ又學藝を勸めて康熙（聖祖の年號）乾隆（高宗の年號）の盛世をなせり清は中央に初め内閣を置きて機務を決し又六部（吏、戶、禮、兵、刑、工）を置きて政務を總べ後ち理藩院を置きて内外蒙古、天山南北路、青海、西藏の政令を委し又軍機處を置きて軍國の大事を決し近時又總理各國事務衙門（外交を司る）と海軍衙門とを置く又地方は支那本部の數省に總督を置きて文武の大權を委し各省に兵事

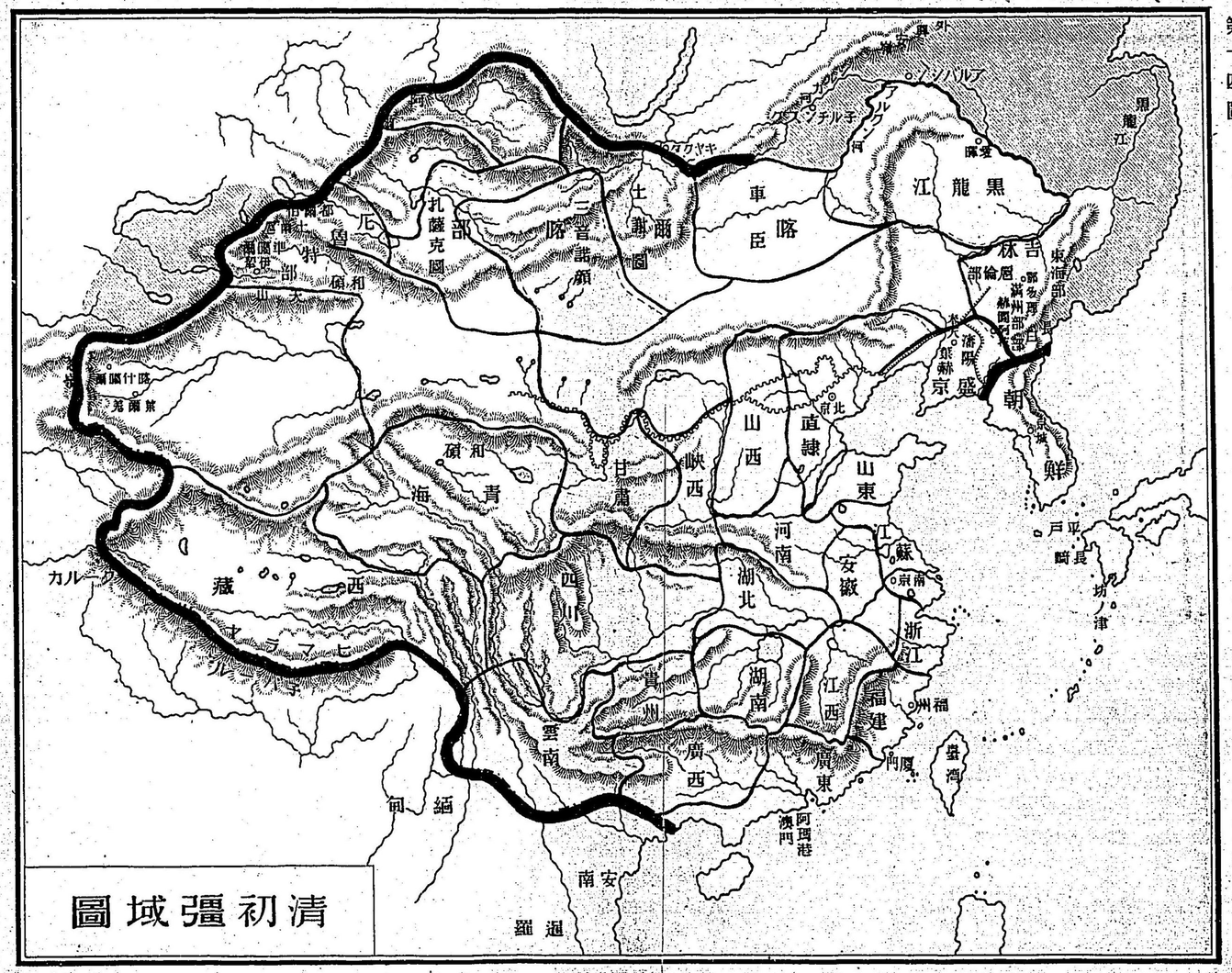
を司る提督、民治を司る巡撫、財賦を司る布政使及刑獄を理する按察使を置く滿州は奉天の府尹及將軍の分治に屬し內蒙古は理藩院に直隸し外蒙古は定邊將軍に隸屬し青海西藏は各〻其辯事大臣の統治を受く陸軍は八旗及綠旗に分る八旗に滿州八旗蒙古八旗漢軍八旗の別ありて京城、滿州、及其他の要地に駐屯し綠旗は漢人よりなりて支那本部の各省を鎭撫せり其他支那本部に勇兵あり內外蒙古、青海に旗兵あり西藏に番兵あり海軍は近時の創設にして北洋、南洋、福建、廣東の四水師あり

兵制

元明の世宋學頗る盛なりしが明末清初には學風一變して遂に考證學となり顧炎武の如き實に其稱首たり聖祖、高宗出でゝ學藝を奬勵し著述を勅撰するに及び考證學は益〻盛となりて閻若璩、毛奇齡、惠棟等の諸大家を出し又歷史地

學藝

第十四圖



理の學も頗る進みて歴史に王鳴盛、趙翼を地理に胡渭、顧祖禹を出せり又詩文も盛に興りて詩に吳偉業、王士禎、蔣士詮等を文に魏禧、侯方域、朱彝尊等を出し又戲曲小說に金聖嘆、李漁等を出せり

宗教

道、佛二教は專ら支那本部に流行し黃派の喇嘛教は西藏、內外蒙古、滿州に行はれ回教は天山南路を中心として甘肅、陝西の地に行はれ基督教は明末より清初に及びて益〻盛なりしが世宗の嚴禁に遇ひて勢一時挫け僅に廣東、廣西の地に流行せり

第五十八課　荷蘭、英吉利、佛蘭西諸國の競爭

荷蘭人の東漸

葡萄牙人に次で勢を東洋に振ひしものを荷蘭人となす荷蘭人は初め東洋の貨物を葡萄牙、西班牙に得て之を歐州諸

國に輸送せしが後ちスマトラに至り（一五九六年）直接に東洋貿易を開きて印度商社を設けぬ是より荷蘭人は葡萄牙、西班牙の殖民地を奪ひ又其商民を逐ひモリッカ群島を略して香料の利益を占めジャワにバタヴィアを建てゝ根據地となせり（一六一一年）既にして荷蘭人は臺灣を占領し（一六二四年）盛に日本（一六〇九年以來）及支那と貿易を營みしが日本の貿易は平戸より長崎に移りて其商利を專にし又支那の貿易は臺灣を鄭成功に奪はるゝに及びて廣東に營めりかくて荷蘭人は葡萄牙人に代りて東洋に勢を振へり

英吉利人の東漸

英吉利人は荷蘭人に先ちて東洋に來り（一五七七年）又印度商社を設け商館を印度、暹羅、ジャワ等に開き貿易を日本の平戸、長崎に創め（一六一三年）又支那の廣東、厦門に試みしが（一六五三年）日本の貿易は和蘭人に支那の貿易は葡萄牙人に皆な妨害せられぬされど印度にては次第に勢を得てマドラスに根據地を建て（一六三九年）ボムベイ、カルカッタに商館を開きて盛に貿易を營めり

佛蘭西人の東漸

佛蘭西人は英吉利人に次で印度商社を設け東洋貿易に從事せしが荷蘭人に妨害せられて勢久しく振はず後ち印度のチャンダナガルに商館を開き又ポンディシェリーに根據地を建てゝ（一六九一年）頻に英吉利人と商利を競ひ本國の戰爭に連れて互に干戈を交へたり

英吉利人佛蘭西人の爭覇

時にムガール帝國は殆ど分崩し各地の藩王は既に獨立の姿をなしゝが會〻南印度の藩王領に相續亂起り（一七四四年）佛蘭西人デュプレーは之に關渉し新に藩王を擁立して一時勢を南印度に振へり然るに英吉利人クライブは身を印度商社の一書記に起し兵を率ひて佛蘭西人の立てし藩王を退

け佛蘭西人に結びしベンゴル藩王をプラッシーに破り一七五七年又佛蘭西人の勢をワンデワッシに挫きて遂に英吉利人の威名を全印度に輝かせり

第五十九課　英吉利領印度

クライブ及ヘスチングス

英吉利人は既にベンゴル副王を廢立してカルカッタ附近の地を得しがまたムカール帝及オード藩王をバクザルに破りてムガール帝を虜とせり一七六四年時にクライブはベンゴル知事となりムガール帝を挾みてベンゴル、ベハール、オリザの實權を握り又オード藩王に納貢を命ぜり既にしてヘスチングスは之に代りてベンゴルを取りオードを保護國とせしが程なく印度總督となり一七七四年大に領内の施治を改良しマーラータ同盟を破り又マイゾール王を挫きて遂に英吉利領印度帝國の基礎を建てたり

ウエレスレー

是れより印度總督は皆な着々經略を行ひしがウェレスレーは印度の三大勢力なるマイゾール王、デンカン藩王及マーラータ同盟を平定し又ムガール帝を保護の下に置けり一八〇四年是より印度總督は領土の統一を圖りて印度河の流域を略しカスミルを隷屬し俾路芝を保護し又オードを併せぬ一八五六年此間東は緬甸の領土を奪ひ西は阿富汗の内事に關渉せり

英吉利緬甸の交渉

緬甸はホトアーフラー位に在りしが會々叛徒を追ひてベンゴルに進入し且アッサムを占領せり英吉利は怒りて緬甸と戰ひ大に之を破りて償金を取り且アラカン、テナッセリムの地を得たり一八二六年是より緬甸は深く英吉利を怨みて其商民を虐待せしかば英吉利は再び緬甸を代ちてペーグを取れり一八五三年

阿富汗事件

波斯はアガ、マハメット出で之を一統してカヂャル朝を建て（一七九四年）阿富汗はドスト、ムハメット起り王シュジャーを逐ひて之を一統せり（一八二六年）既にして露西亞は波斯を擁護し又阿富汗を與國として印度に入らむとせり英吉利は之を憂ひ兵を阿富汗に出してシュジャーを位に復せしが阿富汗人之を悅ばずして亂を作しゝかばまたドスト、ムハメットを位に復して和を結べり（一八五五年）

莫臥兒帝國の滅亡

此際印度總督は着く内治の改良をなしゝが土民は却て之を悅ばず又藩王は窃に領土の恢復を圖れり會く土兵は事に依りて亂を起し（一八五七年）ムガール帝を戴き又不遇の藩王を誘ひて一時恒河の流域一帶の地を攪せり然るに程なく英吉利は之を鎭定してムガール帝を廢し與謀の藩王を罰し且印度商社の政權を收めて印度を政府の直轄とし次で女皇ヴィクドリアに印度女皇の尊號を奉れり（一八七七年）

第六十課　清英吉利の交渉

教匪海賊

清は高宗の末年に至りて始て衰兆を表し教匪苗民の亂屢起りしが仁宗立つに及び（一七九六年）白蓮教徒の亂起りて七年の間湖北、四川、陝西等の地を攪し又海盜蔡牽は南海に出沒し粵賊朱濆は浙江を侵せり

回教徒の亂

時に喀什噶爾汗の後裔張格爾（チャンガル）はコーカンド汗の援を得て天山南路を侵しゝが仁宗死して宣宗立つに及び天山南路の回教徒と通じて遂に喀什噶爾、葉爾羌等を陷れぬ（一八二六年）宣宗因て將を遣し張格爾を伐ちて之を執へ之に通ぜし回教徒を逐ひ又コーカンドの互市を絶てり然るにコーカンド汗は大擧して天山南路を侵しゝかば宣宗は之を諭してまた互市を許し（一八三一年）全く西北の亂を定めしが程なく東

南の患を生せり

阿片の輸入

英吉利人は既に貿易を廣東に營みしが印度商社が本國政府より支那貿易の特權を得るに及び（一六八五年）盛に阿片を清に輸入して大に害毒を流せり宣宗は之を憂ひ林則徐を兩廣總督に任じて便宜阿片の事を處分せしむ林則徐は廣東に至りて英吉利人に嚴命し其所藏の阿片を沒收して之を燒棄し且其輸入を嚴禁せしか尚ほ之を密輸入せしかば遂に其貿易を禁止せり（一八三九年）

阿片戰爭

是に於て英吉利は軍艦を廣東に派して貿易の復舊を迫りしが得ず遂に大擧して廣東、厦門、寧波等の諸港を封鎖し舟山島を占領し又渤海灣に侵入せり宣宗は琦善を廣東に遣して和を講ぜしめしか議調はずして英吉利は廣東を取り定海、鎭海、寧波、乍浦、吳淞、鎭江を陷れて南京に迫れり宣宗は恐れて伊里布、耆英を遣し英吉利の公使と南京に會して和を議せしめ償金（二千一百萬兩）を出し香港を割き廣東、福州、寧波、厦門、上海の五港を開きて局を結べり（一八四二年）

第六十一課　長髮賊の亂　清、英吉利、佛蘭西の交渉

長髮賊の亂

阿片の戰後清室は大に威嚴を損じて長髮賊の亂を招けり初め洪秀全は基督敎を以て徒弟を敎誘せしが遂に亂を廣西に起して自ら太平天國王と稱せり（一八四九年）其徒皆な髮を蓄ふより之を長髮賊と云ふ會〻宣宗死して文宗立ちしが洪秀全は湖南、湖北の地を略して南京に據り殆ど江南の地を定めて更に兵を江北の地に出せり時に曾國藩は兵を湖南に擧げ曾國筌、李鴻章、左宗棠等も各〻兵を起して賊を伐ちしが賊勢尙ほ盛にして江の南北の地に出沒せり清はか

アロー號事件

く内亂に惱めるに際しまた外患をも招けり

清は屢〻南京條約を破りて外人に敵意を表せしが廣東の府吏は恣に英吉利の商船アロー號の船内を搜索して其使役する清人十二名を逮捕せり（一八五六年）香港の知事パークスは大に怒りて之を兩廣總督に嚴談せしか要領を得ず會々佛蘭西の宣教師か清人の殺害に逢ひしかばパークスは佛蘭西を誘ひて共に廣東を攻め清を威嚇して遂に假條約を天津に結へり（一八五八年）次で英吉利、佛蘭西の二公使は北京に於て批准條約を交換せむと欲し白河口に至りしに突然其砲臺より烈しき攻擊を受けたり

英吉利、佛蘭西同盟軍の北清征伐

是に於て英吉利、佛蘭西の二國は同盟軍を組織して直に白河に入り太沽、天津を陷れ清の和議を斥け又僧格林沁（ナンゲリンシン）の兵を破りて遂に北京を陷れぬ文宗は既に難を避けて熱河（直隸省承德府）にありしが恭親王をして和を二國に求めしめ露西亞の公使も之を周旋せしかば和議遂に調ひ清は償金（一千八百萬兩）を出し二國の公使領事の派出を許し基督教徒の保護を諾し牛莊、登州、臺灣、潮州、瓊州、九江、漢口の七港を開けり（一八六〇年）

長髪賊の平定

清は是より專ら力を長髪賊の鎭定に盡し曾國藩を兩江總督に任じて江南の軍務を統べしめしが洪秀全は兵を出して浙江の方面より上海に迫らむとせり時に文宗死して穆宗立ち援を上海在留の外人に求めぬ英吉利、佛蘭西、亞米利加三國の在留民は相議して之に應じ亞米利加人ワルド、英吉利人ゴルドンは洋鎗隊を組織して大に奇功を收め又清の諸將も頻に賊を破りしかば賊勢遂に衰へぬ曾國藩因て諸軍を會し南京を陷れて遂に洪秀全を滅せり（一八六四年）是に於て長髪賊の亂は前後十五年を經て始て平定に歸せり

第六十二課　露西亞の東略　清、露西亞の關係

露西亞の東略

露西亞は欽察汗國の衰微に乘じて獨立を復し（一四八〇年）女第に蒙古の諸汗國を滅して勢を張りしが西歐の諸國が勢を東洋の海面に振ふに當りコサック人を用ひてシベリアの拓殖を創めぬ（一五八〇年）コサック人はもと南露西亞に居りしが露西亞皇帝の命を奉じてシベリアに向ひ部民を服し又市城を築きて遂にオホーツク海及カムチャトカに達せり既にしてホヤルコヴの率ひしコサック人は黑龍江畔の地を探險し次でハバロウの率ひしコサック人は之を占領してアルバシン（雅克薩）城を築けり（一六五一年）

清、露西亞の衝突

當時黑龍江畔の地は清の領內なるを以て世祖は兵を出してコサック人をアルバシンより逐へり然るにコサック人は程なくまた之に據りしかば聖祖は三藩鎭定の後ち先づ愛暉城を築きて之に備へ次でアルバシンを攻めて之を陷れ遂に露西亞のピヨトル大帝に境界の議定を求めてネルチンスク條約を結びスタノウォイ嶺（外興安嶺）アルグン河を以て兩國境界とせり（一六八九年）

愛暉北京の二條約

是より露西亞は益々東略の歩を進めて全くシベリアを定め清とキヤクタ（恰克圖）條約を結びて境界を定め又通商を約し（一七二八年）日本に通商を求めて得ず其樺太蝦夷を侵せり（一八〇六年）其後ちシベリア總督ムラウヴヨフはネルチンスク條約を破りて黑龍江口にニコライブスクを建て清が內亂外患に惱めるに乘じて境界の改定を迫り遂に愛暉條約を結びて黑龍江以北の地を取り烏蘇里江以東の地を兩國共管の地となし又松花、烏蘇里二江の通航權を得たり（一八五八年）既に

して露西亞は清と英吉利、佛蘭西との和議を周旋し其報酬として烏蘇里江以東の地を取り（一八六〇年）次で樺太千島の交換を名として日本より樺太を奪へり

第六十三課　露西亞の南略　清、露西亞　英吉利の關係

露西亞の南略

露西亞はまた意を中亞細亞に注ぎてギルギス部を服し（一八二〇年以來）キワ、コーカンド、ボハラ三汗國の紛爭に乘じて次第にトルキスタンの地を取れりカウフマンは其總督となりて益〻經略の歩を進め遂にボハラを保護國となし（一八八六年）キワを屬國となし（一八七三年）コーカンドを併呑し（一八七六年）遂にアム、アトレク兩河以北の地を得たりしが此際伊犂を占領して清と衝突を起せり

清、露西亞の交渉

清が長髮賊の亂に惱めるに際し回教徒の東干族は亂を起して甘肅より天山南路に至る地を攪せり（一八六二年）張格爾の子ブヅルクは之に乘じて喀什喝爾を陷れしが程なく其將ヤクブは之に代り東干族を降して天山南路を併せ獨立國の承認を英吉利、露西亞に求めしが露西亞は其邊境を靖くすと稱して伊犂を占領せり（一八七一年）清の陝甘總督左宗棠は頻に回教徒を破り穆宗死して今帝載湉立つに及び（一八七五年）遂に天山南路を征定せしかば清は伊犂の還附を露西亞に求めぬ然るに議容易に調はず事態頗る危急に迫りしが二國互に讓歩して遂に和を約し清は償金（九百萬ルーブル）を出し霍爾果斯（ルゴス）河以西の地を割けり（一八八〇年）

露西亞英吉利の交渉

露西亞は是より着々南侵の歩を進めて遂にメルヴを取り更に進みて阿富汗の西北境を侵せり英吉利は既に露西亞の南侵を憂ひて頻に防禦の策を講じ屢〻阿富汗の內事に

干渉して遂に之と同盟を結び以て露西亞に備へしが露西亞か阿富汗の西北境を侵すに及び阿富汗を助けて之に抗議せり然るに議容易に決せず兩國の平和一時破れむとせしが協議漸く成りて阿富汗の西北境を定めぬ（一八八七年）程なく露西亞はまた兵をパミル高原に出しゝかば英吉利はまた之に抗議して阿富汗の東北境を定めたり（一八九五年）

越南の興起

第六十四課　安南、暹羅、佛蘭西の關係

廣南の滅亡に際し王子阮福映は佛蘭西の宣教師に助けられて暹羅に走りしが遂にファヤチャングリの援を得て下交趾を復し更に佛蘭西に化南島の割讓及通商の許可を豫約して其援兵を借り先づ中、上兩交趾を復し次で東京を略し遂に全く安南の地を一統し（一八〇二年）國を越南と號して順化に都し清の仁宗の封冊を受けたり。

眞臘の亂

越南佛蘭西の交渉

甘埔寨は越南、暹羅二國の間に位し其南半は既に越南の版圖に入りて下交趾となり其北半は眞臘國にして越南の附庸たり會〻眞臘に王位相續の爭起り（一八三五年）王弟は其位を得むと欲して援を暹羅に求む暹羅は眞臘に關して屢〻越南と爭ひしが是に至り王弟を援けて眞臘を侵し越南もまた兵を出しゝか屢〻擊破せられて眞臘は遂に暹羅の附庸となれり（一八四一年）

越南は世々佛蘭西人を忌みて前約を履行せず又基督教を憎みて宣教師を虐遇せり阮弘治の時佛蘭西の軍艦來りて之を詰りしかど要領を得ず越南の軍艦を破碎して去れり既にして阮弘任立ちまた宣教師を虐遇せしかば佛蘭西は西班牙を誘ひ共に軍艦を派して化南を衝き自ら南に轉じて遂に柴棍を占領せり（一八五八年）會〻東京に叛亂起り越南は

南北に敵を受けしかば遂に和を佛蘭西に求めて償金（二千萬フラン）を出し且下交趾の一部を割けり（一八八六年）

佛蘭西の前印度經略

佛蘭西は曩に英吉利と勢力を前印度に爭ひて失敗し轉じて志を後印度に注ぎしが遂に下交趾の一部を得て柴棍を根據地とせり是より佛蘭西は眞臘が暹羅の制御を悅ばざるに乘じて之を保護の下に置き（一八七三年）又越南に迫りて下交趾の殘部を奪ひ着々前印度の經略を創めたり

暹羅の開國

時に暹羅はマハモンクト位に在り隣國の末路を見て大に警醒し遂に開國の方針を採りて盟約を先づ英吉利と結び次で佛蘭西、亞米利加、清と結べり今王チュラロンコルン繼ぎ（一八八六年）頗る令名あり夙に歐米の文化を採りて國内の改良を圖り又日本と條約を結びて舊交を尋めたり（一八八七年）

第六十五課　清、佛蘭西の交渉

紅河通航事件

佛蘭西は越南北部の鑛山に着目し妄に船を紅河（富良江）に入れ又兵を東京に出しゝが其逐はるゝに及びて越南に迫り紅河通航及基督教公布の二權を得て越南の獨立を認めぬ（一八七四年）然るに程なく佛蘭西は商賈の保護を名として兵を河内、海防等に派し且紅河上流地の採鑛權を求めたり時に長髮賊の殘黨は紅河上流の地に居り其將劉永福は黑旗兵を率ひて勢頗る强し越南は佛蘭西の暴横を怒り劉永福に命じて大に兵備を修めしむ佛蘭西は越南と戰を開きて直に河内を取りしが忽に劉永福に復せられぬ時にクールベーは軍艦を率ひて來り山西、北寧等を取りて東京を占領し更に順化を衝きて之を陷れしかば越南は遂に和を請ひて佛蘭西の保護國となり且東京を割けり（一八八三年）

越南佛蘭西の交渉

清、佛蘭西の交渉

清は越南が其封冊を受けしを名として越南、佛蘭西の和約

に抗議せしが李鴻章の議を用ひて一旦其主權を放棄せり

佛蘭西因て兵を諒山に出しいに會〻清兵と衝突して多く死傷者を生じ償金（一千二百萬フラン）を清に要求せしか忽に拒絶せられぬ是に於て兩國の和親遂に破れ佛蘭西の將クールベは海軍を率ひて福建艦隊を福州附近に擊沈し澎湖島を占領し臺灣の諸港を封鎖せり又ネグールは陸軍を率ひて諒山を陷れ將に鎭南關内に侵入せむとせり會〻佛蘭西は外交の政策を改めて遂に清と和議を天津に結び清は越南の主權を放棄し東京地方の占領を佛蘭西に許し佛蘭西は償金の要求を撤回し澎湖島を清に返せり（一八八五年）

佛蘭西暹羅の交渉

佛蘭西は既に勢力を眞臘、越南の地に振ひしがまた暹羅に迫りてメイコン河以東の地を取れり（一八八九年）時に英吉利は既に緬甸王チボーの暴戾を怒りて其國土を沒し（一八八七年）縱に意をメイコン河上流の地に注ぎしが佛蘭西が河東の地を得たりと聞きて之に抗議し二國殆ど開戰に至らむとせしが議遂に調ひ恣に暹羅の國土をメナン河領の地に限りて其餘を分てり（一八八九年）

第六十六課　日本、清、韓の關係

清朝鮮の關係

明の末朝鮮は日本の侵略を蒙りて頗る之を仇視せしが德川家康が和好を求むるに及び遂に之に應ぜり仁祖立ち好を滿州の太祖に通ぜしが窃に明の命を奉せしかば太祖は怒り自ら朝鮮を伐ちて平壤を陷れぬ仁祖は敵鋒を江華島に避けて和を請ひしが後ち盟約に背きて清の太宗の親征を蒙り京城を陷れられて遂に降れり

朝鮮の外難

朝鮮は是より世〻清の封冊を受けて今王李熙に至り（一八六三年）大院君李是應政を攝して人才を登庸し大に政綱を革新

せり曩に佛蘭西の宣教師來りて基督教を傳へ其教漸く流布せしが李昰應は痛く基督教を斥けて其教徒を殺しゝかば佛蘭西は軍艦を派し江華島を砲擊して其怨に報い（一八六六年）又で亞米利加の軍艦も之を砲擊し曾て其商民が蒙りし殘害に報いたり

日本朝鮮の關係

日本の德川氏は鎖國の方針を守りて露西亞に樺太、蝦夷を侵されしが遂に亞米利加の勸告に從ひて歐米の諸國と通商條約を結べり（一八五八年）程なく內亂起りて德川氏倒れ維新の大業なるに及び益〻開國の方針を採りて屢〻朝鮮に修好を求めしが李昰應は外國と事端を生じ意氣大に傲りて之を斥けぬ（一八七一年）日本は一旦之を怒りしが尙ほ忍びて頻に開國を朝鮮に勸告せり

臺灣事件

日本は清と修好條約を結び（一八七一年）又其藩屬と稱する琉球を封冊して其外交を處置せしが會〻臺灣の生蕃が琉球及備中の漂民を殺害せしかば之を清に照會せり然るに清は生蕃を以て化外の民なりと答へしかば日本は西鄕從道に命じて臺灣を占領せしめ清か急に前言を變じて之に抗議するに及ひ大久保利通を清に遣し談判を開きて遂に償金（五十萬兩）を取れり（一八七四年）時に日本は露西亞と協議し樺太と千島とを交換して兩國の境界を定めたり（一八七五年）

日本朝鮮の交涉

朝鮮は依然鎖國の方針を守り且清の藩屬と稱して日本の勸告を納れず臺灣の役後は清に教誘せられて益〻日本を嫌ひ剩へ其軍艦雲揚號を江華島の邊に砲擊せり是に於て日本は黑田清隆を遣して其罪を問ひ遂に朝鮮は獨立國にして日本と對等の交際をなし且釜山の外仁川、元山の二港を開くことを約し（一八七六年）亞米利加、佛蘭西、英吉利、露西亞も

之に傚ひて前後朝鮮と條約を結べり既にして日本は琉球藩を廢して沖繩縣を置き（一八七七年）清の感情を損して爾後國際上毎に圓滑を缺けり

第六十七課　日本、清の交戰

朝鮮の第一亂

朝鮮は李熙既に長じて政を親らし閔后の一族は朝に列して勢日に盛なり李昰應は之を見て心頗る不平なりしが遂に鎭兵を刺嗾して閔后の一族を擊ち併せて日本の公使館を襲はしめたり（一八八二年）是に於て日本は井上馨を遣し其罪を問ひて償金（五十萬圓）を取り且公使館に護衛兵を置き（一八八二年）清は李昰應を拘して北京に送り且京城に駐在兵を置けり

朝鮮の第二亂

時に朝鮮に獨立、事大の二黨あり獨立黨は日本に賴りて獨立の國體を維持せむと欲し又事大黨は清に附して依然其外藩たらむと欲し兩黨互に軋轢せり獨立黨の金玉均、朴泳孝等急に起りて事大黨の閔泳翊等を殺し國王を擁して援護を日本の公使に請ひしが事大黨は清兵の助を得て獨立黨を破り且日本の公使館を燒けり（一八八四年）是に於て日本は井上馨を朝鮮に遣し其罪を問ひて償金（十三萬圓）を取り又伊藤博文を清に遣し李鴻章と天津に會して爾後兩國共に朝鮮の駐在兵を止め之を要する時は豫め相通ずべきことを約せり（一八八五年）

東學黨の亂

既にして朝鮮の南部に東學黨の亂起り其勢轉た猖獗なり清は事大黨の求に應じて兵を牙山に出し日本もまた兵を京城に出して居留民を保護し且清に提議して共に朝鮮の獨立を扶持せむとせり然るに清は朝鮮を外藩なりと稱して日本の提議を拒絕せしかば日本は先づ李昰應を起して

攝政となし次で牙山の清兵を掃ひ又豐島に清艦を破り遂に宣戰を公布せり（一八九四年）

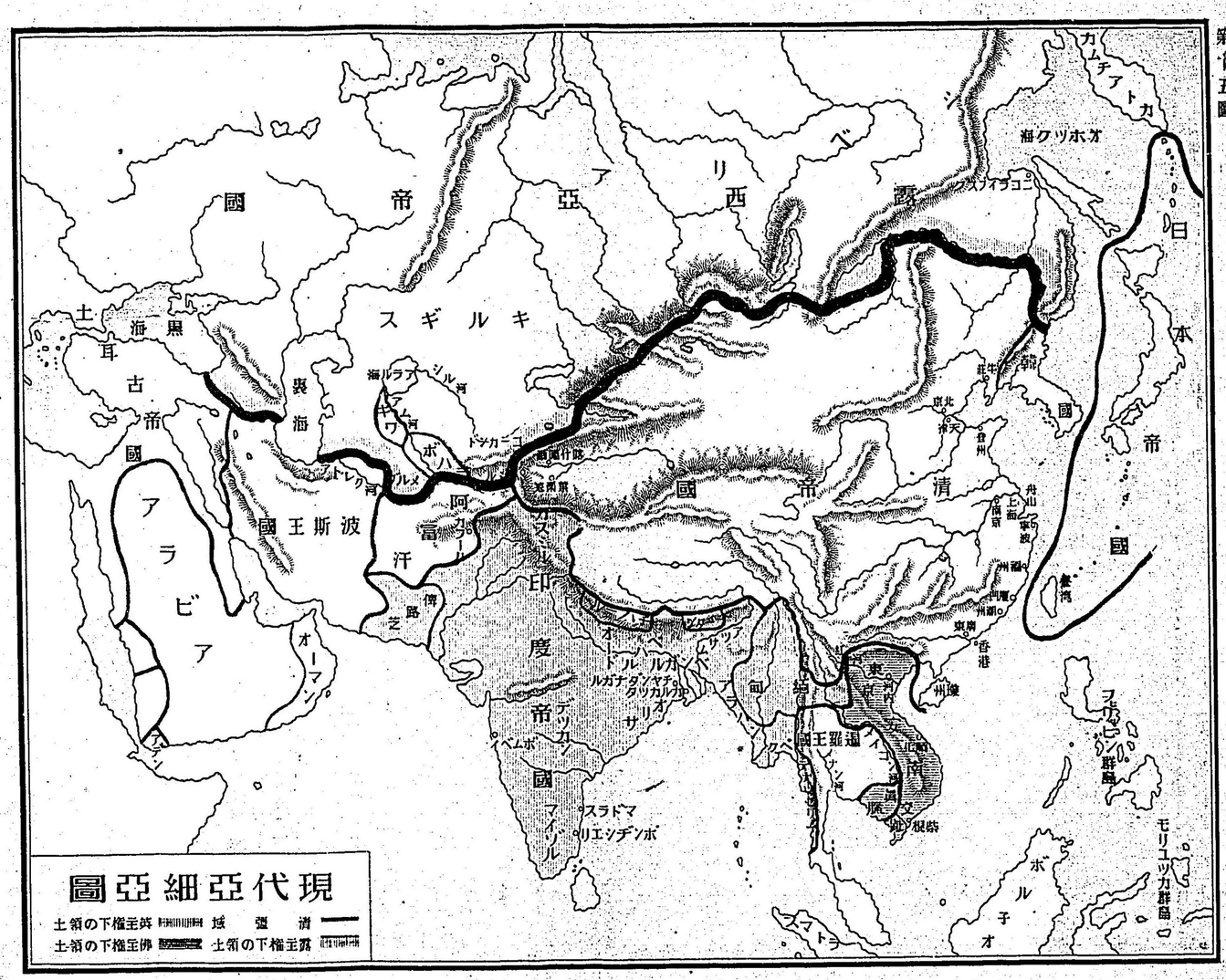
日本清の交戰

是に於て日本の山縣有朋は第一軍を率ひて清兵を平壤に擊破し長驅して遼東に侵入し伊東祐亨は艦隊を率ひて北洋水師を黃海に破り大山巖は第二軍を率ひ直に遼東半島に上陸して金州、旅順を陷れ第一軍と連絡して牛莊を拔き又別に兵を出して威海衛を陷れ伊東祐亨もまた北洋水師を降して渤海の關門を奪ひ又別軍は南方に向ひて澎湖島を占領せり

馬關條約

是に至り清は勢屈し李鴻章を日本に遣して和を請ひ伊藤博文、陸奥宗光と馬關に會商して朝鮮の獨立を確認し償金二億兩を出し遼東半島、臺灣、澎湖列島を割き沙市、重慶、蘇州、杭州を開くことを約せり各國もまた其利に均霑せしが露

第十五圖



西亞は獨逸、佛蘭西を誘ひ日本が遼東半島を保有するは東洋の平和に不利なることを勸告せり日本は時勢を察して之を納れ三千萬兩の代償金を受けて遼東半島を清に還附せり（一八九五年）

東洋史綱終